スリランカ北部、東北部における文化財保存と活用

調査報告書

文化遺産国際協力コンソーシアム

JCIC-Heritage

スリランカ北部、東北部における文化財保存と活用

調査報告書

文化遺産国際協力コンソーシアム

序 文

本報告書は文化遺産国際協力コンソーシアムが平成24年度に実施したスリランカ民主社会主義共和国（以下、スリランカ）を対象とする協力相手国調査、およびその調査結果をもとに平成25年度、26年度国際交流基金文化協力（助成）プログラムとして実施された調査事業の内容をまとめたものです。

近年、スリランカは観光地として注目を集めています。2009年の内戦終結直後は日本人観光客が年間1.5万人にも満たなかったのが、現在は年間2倍以上の人が訪れるようになりました。これら多くの観光客を魅了しているのが、シーギリヤに代表される文化遺産の数々やゴールといった海のシルクロードの町、地域的にはスリランカ中部、南部が中心です。

日本は1952年にスリランカと国交を樹立し、それ以降、開発援助、人的交流の面等で良好な二国間関係を築いてきました。2013年には安倍首相とラージャパクサ大統領が「日本・スリランカ共同声明－国交樹立60周年を越えた日本・スリランカのパートナーシップの強化－」を発表し、続く2014年には安倍首相がスリランカを訪問する等、両国間の関係は今後益々強固になることが予想されます。

本書が、我が国ではまだあまり知られていないスリランカ北部、東北部地域の文化遺産の保護の一助になれば幸いです。最後に、この調査の実施にあたりご尽力賜りました外務省、文化庁、国際交流基金、国際協力機構（JICA）等の日本国内の関係者の皆様、並びにスリランカ国家遺産省考古局をはじめとする現地の関係諸機関の多大な協力に深く御礼申し上げます。

文化遺産国際協力コンソーシアム事務局

例 言

1. 本書は、スリランカ民主社会主義共和国における文化財保護の状況に関する協力相手国調査および同調査に関連して実施された国際交流基金文化協力（助成）プログラムの調査報告であり、文化庁委託文化遺産国際協力コンソーシアム事業の一部として刊行したものである。

2. 本書の執筆、編集、デザインの担当者は以下のとおりである。

執筆

1-1.：原本知実（東京文化財研究所 客員研究員）

1-2.、2.、7.、付録：井内千紗（文化遺産国際協力コンソーシアム アソシエイト・フェロー）

3-1.、4-2.、5-2.、6-2.：小泉惠英（東京国立博物館学芸企画部 企画課長）

3-2.、4-1.、5-1.、6-1.：福山泰子（龍谷大学国際文化学部 准教授）

編集　井内千紗、佐多麻美、川嶋陶子（以上、文化遺産国際協力コンソーシアム事務局）

3. 報告書中に記載の経度緯度は、2014年の調査分については調査時に利用したカメラ（Nikon D5300）で計測した数値を記載した。2013年のみ調査した建造物・遺跡についてはスリランカ考古局提供の資料やgoogle mapの数値を参考にしている。

4. 表紙の写真：旧ジャフナ庁舎正面玄関

目次

序文 3
例言 4

1. 調査概要
1-1. 文化遺産国際協力コンソーシアム協力相手国調査（平成 24 年度） 7
1-2. 国際交流基金文化協力（助成）プログラム事業（平成 25 年度、26 年度） 10

2. スリランカにおける文化財保護と国際協力
2-1. 国内の体制 17
2-2. スリランカの文化遺産保護に対する国際協力状況 19

3. 北部、東北部における文化遺産と地域開発
3-1. トリンコマリー海軍海事史博物館 22
3-2. ジャフナの文化複合施設 24

4. 北部、東北部の博物館
4-1. ジャフナ 27
4-2. トリンコマリー 30

5. 北部、東北部の文化遺産
5-1. ジャフナ 34
5-2. トリンコマリー 49

6. 北部、東北部地域以外の関連調査
6-1. ウァウニア 62
6-2. アヌラーダプラ 63

7. まとめ、協力の可能性
7-1. スリランカ北部および東北部における文化財保護の現状と課題 66
7-2. 日本に対する協力および支援の期待 67
7-3. 今後の協力の可能性 67

付録
スリランカ史略年表 70

1. 調査概要

1–1. 文化遺産国際協力コンソーシアム協力相手国調査（平成24年度）

■ 調査の背景・経緯

文化遺産国際協力コンソーシアムでは、我が国における文化遺産国際協力活動の推進に役立てるために、アジア諸国を中心に毎年2カ国程度を対象として文化遺産の国際協力に関する情報収集・情報共有を行なっている。平成24年度は対象国としてスリランカを選定し、2013年3月2日～12日に協力相手国調査として現地調査を行なった。本報告書で報告する支援事業は、この協力相手国調査の成果をもとに実施した。

スリランカは何世紀にもわたって周辺諸国の影響を強く受け、そのなかで独自の文化的発展を遂げてきた。紀元前3世紀頃から仏教王国として栄え、その後は隣国のインドや東南アジア、アラビア、ローマ等との交流を通じて、ヒンドゥー教、イスラム教、キリスト教といった宗教も伝播し、多民族・多宗教が共存する独特な社会が構築されていった。文化の混交と調和はさまざまな文化遺産を創造し、建築、彫刻、絵画、工芸品、文学といった有形遺産とともに、独特の宗教儀式のような無形遺産等、現在でもさまざまな形で受け継がれている。政府はこれらの文化遺産の重要性を十分に認識しており、遺産保護に対する意識は従来非常に高いことで知られている。この姿勢は、1980年という早い時期から世界遺産条約の締約国となり、すでに6件の世界文化遺産を擁することからもわかる。また、スリランカの文化は古くから多くの外国人を魅了し、文化遺産はこの国の観光資源としても重要な役割を果たしてきた。13世紀にはマルコ・ポーロもこの地を訪れ、『東方見聞録』に記している。

長い歴史の中で多民族がバランスを保って共存してきたスリランカであったが、英国からの独立後に民族対立による紛争が起こり、2009年まで約30年にわたって内戦状態が続いた。この間もスリランカ政府は主要な文化遺産の保護に努め、中部や南部等の文化遺産は大切に守られていた。しかし激しい戦闘地域となった北部や北東部では、政府でさえ文化遺産を適切に保護・管理することは難しく、長期にわたってこの地域の文化遺産は放置され、保護・保存のみならず被害状況の把握すら困難な時期が続いた。内戦前には我が国の研究者がトリンコマリー等東北部で調査を実施していたが、長期的に続いた不安定な情勢は研究者の立ち入りすら困難にさせた。中部や南部等の安定した地域に対しては国際協力等も盛んに行なわれ、情報も豊富であったが、北部や東北部に関しては情報がほとんどない状況であった。その後内戦終結から数年が経過し、地雷除去等も進む中で、ようやく北部や東北部への立ち入りが可能となった。スリランカは今なお内戦後の復興段階にあり、各国が国際協力を進めていく中で、主要な産業である観光に直結する文化遺産の保存と活用は重要な分野の1つである。こうした状況を背景に文化遺産国際協力コンソーシアムでは、情報のきわめて少ない北部や東北部等の文化遺産の状況と今後の国際協力へのニーズを把握するため、スリランカでの協力相手国調査を実施した。

■ 調査目的

・スリランカにおける文化遺産保護の現状を調査
　—文化遺産保護状況、国内の文化遺産管理体制、他国からの支援状況等
・国際協力に関するニーズ把握
・北部や東北部等内戦により被害を受けた地域の現状を踏査

■ 日程

2013年3月2日～3月12日

■ 派遣メンバー（調査実施時の肩書き）

福山泰子（龍谷大学国際文化学部 准教授）

原本知実（文化遺産国際協力コンソーシアム アソシエイト・フェロー）

■ 調査内容

スリランカでは文化遺産を担当する組織が複数存在する。今回の調査は主に文化遺産の保護・保存を担当する国家遺産省の協力を得て実施することとなった。国家遺産省の考古局は地方各地に支部を構えており、北部のジャフナでは本格的な文化遺産の情報収集や保護保存を開始したばかりというタイミングで調査を進めることができた。また、JICAスリランカ事務所を訪問し、内戦後の国際協力全般の状況と北部、東北部の情勢、そして文化遺産保護の国際協力について聞き取りも行なった。

写真 1.　国家遺産省とのミーティング

ジャフナに考古局の支部が置かれたと言うものの、現状では遺跡等の数が非常に多いこと、寺院等の宗教施設に行政が入ることが困難な場合があること、内戦で被害を受けた文化遺産の数が多く対応する人的資金的資源が十分でないこと等の理由により、現地担当者でさえも情報収集に苦慮している。

こうした中での調査の結果、北部にも紀元前から植民地時代までのさまざまな時代の文化遺産が存在することを確認した。急速に開発が進む現状ではこれらの遺跡を保護するために早急な対応が必要である。また、今後は地雷の撤去がさらに進み、調査可能な範囲も拡大していくと見られるため、建造物、遺跡等の詳細調査に我が国の専門家が協力できる部分も大きいといえる。

文化遺産の保護には地元住民の努力が不可欠であり、そのためには彼ら自身が遺産の価値を正しく認識する必要がある。調査実施時、ジャフナの街中には荒廃した歴史的建造物が放置されており、これらに関する説明書きの看板等もないため、地元住民に文化遺産として認識されていないものが非常に多かった。今後は遺産の価値を教育によって正しく伝え、地元住民の積極的な保護への関与を勧めることが急務であるといえる。

民族紛争後の国々では平和に向けた歴史教育が重要であり、ここで博物館が果たす役割は大きい。スリランカも例外ではなく、北部にある博物館を活用することも検討する必要がある。特に北部にはジャフナ考古博物館があり、内戦中も地元住民の努力によって守られてきた。この博物館を整備し、スリランカ北部での多文化共存の歴史の学びの場とすることも今後の重要な課題と考えられる。

また文化遺産保護には従事する人材の確保が重要となってくる。幸いなことに内戦を経てもジャフナ大学等の教育機関は高い水準を維持しており、文化遺産保護に従事する人材は着実に育成されていることが明らかとなった。

以上のような成果をもとに、ジャフナ考古博物館への支援が急務であると考えた。

■ 表 1.　行動記録

日付	地名	訪問先	内容
2013/3/3	コロンボ	コロンボ国立博物館 Colombo National Museum	視察
2013/3/4	コロンボ	JICAスリランカ事務所	面談
2013/3/5	コロンボ	国家遺産省 Ministry of National Heritage (MNH)	面談
2013/3/6	ジャフナ	国家遺産省考古局北部支部 Regional Archaeological Office (North Province), Dept. of Archaeology, MNH	面談
		ジャフナ考古博物館 Archaeological Museum, Jaffna	調査
		サンギリ・トープおよび王宮址 Sangili Topu and Foundation base belonging to Sangili (Changiliyan) Palace	遺跡調査
		マンディリ・マナイ Mandri Manai	
		旧ジャフナ庁舎 Jaffna Old Kachcheri Building Archaeological Site	
2013/3/7	ジャフナ	ジャフナ・フォート Jaffna Fort	遺跡調査
	ジャフナ (デルフト島)	ダッチ・フォート址 Old Dutch Fort	遺跡調査
		仏教遺跡 Ancient Buddhist Site	
2013/3/8	ジャフナ	ナルール・カンダスワーミ・コーウィル Nallur Kandaswamy Kovil	遺跡調査
		カイラーサナータ・コーウィル Kailasanathar Kovil	
		ジャフナ図書館 Jaffna Library	
		マズラウッディーン・スクール Mazrauddeen School	
		ジャフナ大学 University of Jaffna	面談
2013/3/9	トリンコマリー	ギリカンダカ・ウィハーラ Girikandaka Vihara	遺跡調査
		クッチャウェリ Kuccaveli	
		ウェルガム・ウェヘーラ Velgam Vehera	
2013/3/10	コロンボ	在スリランカ日本大使館	面談
2013/3/11	コロンボ	コロンボ市内	資料収集

■ 表 2.　面談者

氏名	役職	所属機関
Jagath Balasuriya	Minister of National Heritage	Ministry of National Heritage
Senarath Dissanayaka	Director General	Dept. of Archaeology, Ministry of National Heritage
Nimal Perera	Deputy Director (Excavations)	Dept. of Archaeology, Ministry of National Heritage
Prasanna B Ratnayake	Acting Director (Architectual Conservation)	Dept. of Archaeology, Ministry of National Heritage
N Shanmugalingam	Professor	University of Jaffna
P Pushparatnam	Senior Lecturer	University of Jaffna
笹井大嗣	一等書記官 広報・文化交流案件担当	在スリランカ日本大使館
飯田鉄二	次長	JICA スリランカ事務所
Cabral Indika	プロジェクトスペシャリスト	JICA スリランカ事務所

1–2. 国際交流基金文化協力（助成）プログラム事業（平成25年度、26年度）

■ 調査の背景・経緯

1-1.に既述の協力相手国調査の結果を受け、当コンソーシアムは内戦の影響を受けた北部、東北部の博物館を中心とする文化財保存の状況についてより詳しい情報を収集し、同地域の開発に文化財がどのように活用されているのかを調査する必要があると認識した。そこでスリランカ北部、東北部における文化財保存とその活用について現地職員と現状を共有し、今後の活用のあり方について日本とスリランカの専門家の間で意見交換を行なう事業を立案した。

この新たな調査実施にあたり、当コンソーシアムは協力相手国調査を実施した福山泰子に加え、2008年に東京国立博物館で実施した「スリランカ―輝く島の美に出会う―」展を監修した同館の小泉惠英に調査協力を要請した。小泉、福山は国際交流基金の助成を受け、スリランカ国家遺産省考古局協力のもと、2014年2月、5月の2度にわたり北部、東北部の博物館を中心とする文化財保存や活用の状況や課題を調査する機会を得た。当コンソーシアムは両名の調査を支援するという立場で、同事業に参画した。

■ 調査目的

・博物館の展示や文化財の保存、活用の現状や課題に関する聞き取り調査
・博物館が所蔵する仏教美術を中心とする文化財の出土地調査
・文化遺産の保全状況に関する情報収集

■ 日程

2014年2月16日～27日
2014年5月14日～21日

■ 派遣メンバー

小泉惠英（東京国立博物館学芸企画部 企画課長）
福山泰子（龍谷大学国際文化学部 准教授）
井内千紗（文化遺産国際協力コンソーシアム アソシエイト・フェロー）

■ 調査内容

本調査では、考古局関係者、大学の専門家および博物館職員に聞き取りを行ない、また博物館や遺跡を視察し実際の管理・保全状況を調査した。ジャフナ考古博物館、トリンコマリーの海軍海事史博物館では現地職員との意見交換にも重きをおいた。

2月の調査初日には考古局長と面会し、調査計画の調整を行なった。そこで考古遺跡として登録されている旧ジャフナ庁舎を文化複合施設として再活用する計画があること、また同様の計画がトリンコマリーですでに進行中であるとの情報を得た。本事業ではこのような文化財の活用を軸とする地域開発に着目しながら現地の考古局員とともに現状を調査し、課題解決に向けて意見交換を行なうこととなった。

2月の調査では、将来的には新しい文化施設に移設予定であるジャフナ考古博物館の収蔵品の展示、管理状況等を調査し、博物館の職員と今後の展示物の保存・管理の方法等について意見交換した。移設先となる予定の旧庁舎の再活用計画については、実際の計画案を作成したスリ・ジャヤワルダナプラ大学（University of Sri Jayewardenepura）のプラシュナタ・B・マンダワラ（Prashnatha B Mandawala）教授と旧庁舎を視察しながら現計画の説明を受けた。また、ジャフナ各地の遺跡の状況について情報を収集するため、現地の考古局職員とともに各遺跡を視察し、現状や課題を確認した。ジャフナでの調査終了後は考古局に調査内容を報告し、改善点の提案や

今後の展開について意見交換した。

5月の調査では、考古局がトリンコマリーの観光開発の中核を担うと期待するトリンコマリー海軍海事史博物館の視察を中心に、同地域の遺跡や遺物の保管庫、博物館を調査した。同博物館は今後徐々に展示を充実させる予定であったことから、改善点等についてアドバイスを求められた。また、調査終了後はジャフナでの調査と同様、現地の考古局職員と現状や今後の管理計画について意見交換を行なった。

2月と5月の調査時に聴取した内容は第2章以降の各項目に記載している。また、ジャフナの文化施設設置計画やトリンコマリーの博物館について意見交換した内容については、第3章だけでなく、今後の協力の可能性として第7章でも述べる。

写真 2.　ジャフナ考古博物館職員と意見交換

写真 3.　トリンコマリーでの聞き取り調査

■ 表 3.　行動記録（平成 25 年度、26 年度）

平成25年度

日付	地名	訪問先	内容
2014/2/17	コロンボ	国家遺産省考古局 Department of Archaeology, Ministry of National Heritage (MNH)	資料収集、面談
		コロンボ国立博物館 Colombo National Museum	展示・収蔵品調査
2014/2/18	コロンボ	国立自然史博物館 National Museum of Natural History	展示・収蔵品調査
		灌漑博物館 Irrigation Museum	
2014/2/19	アヌラーダプラ	アヌラーダプラ博物館 Anuradhapura Museum	展示・収蔵品調査
		アヌラーダプラ民俗博物館 Anuradhapura Folk Museum	
	ウァウニア	ウァウニア博物館 Vauniya Museum	展示・収蔵品調査
		サマランクラマ Samalamkulama	遺跡調査
		マドゥカンダ Madhukanda	
2014/2/20	ジャフナ	国家遺産省考古局北部支部 Regional Archaeological Office (North Province), Department of Archaeology, MNH	面談
		旧ジャフナ庁舎 Jaffna Old Kachcheri Building Archaeological Site	遺跡調査
		ジャフナ考古博物館 Archaeological Museum, Jaffna	展示・収蔵品調査、面談
		ジャフナ・フォート Jaffna Fort	遺跡調査

日付	地名	訪問先	内容
2014/2/21	ジャフナ	ジャフナ大学人文学部歴史学科 Department of History, University of Jaffna	面談
		ジャフナ大学歴史学科K・インドラパーラ博士考古博物館 Dr. K Indrapala Archaeological Museum, Department of History, University of Jaffna	展示・収蔵品調査
		ジャフナ考古博物館 Jaffna Archaeological Museum	展示・収蔵品調査、 面談、個人研修
		ナルール・カンダスワーミ・コーウィル Nallur Kandaswamy Kovil	視察
2014/2/22	ジャフナ	ナーガディーパ・ウィハーラ Nagadipa Vihara	視察
		ナーガ・プーシャニ・アンマン寺院 Naga Pooshani Amman Temple	
		ハメンヒール・フォート Fort Hammenhiel	
2014/2/23	ジャフナ	ヤムナリ貯水池 Yamunari pond	遺跡調査
		サンギリ・トープおよび王宮址 Sangili Topu and Foundation base belonging to Sangili (Changiliyan) Palace	
		マンディリ・マナイ Mandri Manai	
		ニラワライ Nilavarai	
		テル・モディ・マダム Theru Modi Madam	
		ウァッリプラム Vallipuram	
		ワダマラチーッチ Vadamarachchi	
		聖アントニウス協会 St. Antonius Church	
2014/2/24	ジャフナ	カンタロダイ仏教遺跡 Kantharodai Buddhist Site	遺跡調査
		マーウィッダプラム・カンダスワーミ・コーウィル Maviddapuram Kanthaswamy Kovil	
		ナグレーシュワラム寺院 Naguleswaram Temple	
		ダンパコラ・パトナ Dambakola Patuna	
2014/2/25	コロンボ	Eme. Prof. Leelananda Prematillekeと面会	面談
		在スリランカ日本大使館	
		コロンボ国立博物館	面談、展示調査
		国家遺産省考古局	報告会

平成26年度

日付	地名	訪問先	内容
2014/5/14	コロンボ	国家遺産省考古局	打合せ
2014/5/15	キャンディ	仏歯寺 Dalada Maligava	視察
		国際仏教美術館 International Buddhist Museum	展示・収蔵品調査
2014/5/16	トリンコマリー	トリンコマリー海軍海事史博物館 Naval and Maritime History Museum Trincomalee	展示・収蔵品、建造物調査
		コーネシュワラム・コーウィル Koneswaram Kovil	遺跡調査
		国家遺産省考古局トリンコマリー巡回拠点 Trincomalee Circuit House, Department of Archaeology, MNH	面談
2014/5/17	トリンコマリー	クッチャウェリ Kuccaveli	遺跡、保管庫調査
		ギリカンダカ・ウィハーラ Girikandaka Vihara	遺跡調査
		リディカンダ Rideekanda	遺跡、保管庫調査
		ウェルガム・ウェヘーラ Velgam Vehera	遺跡調査
		カンニャ Kanniya	
		第二次世界大戦戦没者墓地 Trincomalee War Cemetry	視察
2014/5/18	トリンコマリー	ランカー・パトナ Lanka Patuna	遺跡調査
		セールウィラ考古博物館 Archaeological Museum Seruvila	展示・収蔵品調査
		セールウィラ・マンガラ・ラージャ・マハー・ウィハーラ Mangala Raja Maha Vihara, Seruvila	遺跡調査
		トリンコマリー考古博物館 Trincomalee Archaeological Museum	展示、保存状況調査
		国家遺産省考古局トリンコマリー巡回拠点 Trincomalee Circuit House, Department of Archaeology, MNH	面談
2014/5/19	トリンコマリー	ゴーカンナ・ウィハーラ Gokanna Viharaya	遺跡調査
		フォート・フレデリック Fort Frederick	視察
		シュリー・アクボプラ・ラージャ・マハー・ウィハーラ Sri Akbopura Raja Maha Vihara	遺跡調査
2014/5/20	コロンボ	オランダ時代博物館 Dutch Period Museum	視察
		国家遺産省考古局	資料収集、報告会

■表 4.　面談者一覧（平成 25 年度、26 年度）

氏名	役職	所属機関
Senarath Dissanayaka	Director General	Department of Archaeology, Ministry of National Heritage (MNH)
Palitha Weerasinghe	Acting Assistant Director	Dept. of Archaeology, MNH
Malkanthy	Acting Assistant Director	Regional Archaeological Office (North Central Province), Dept. of Archaeology, MNH
L M Goonathikakabanda	Acting Assistant Director	Regional Archaeological Office (North Province), Dept. of Archaeology, MNH
Rev. Gnanaloka	Research Officer	Dept. of Archaeology, MNH
Brito Wapitiya	Research Officer	Dept. of Archaeology, MNH
Jayantha	Regional Officer	Regional Archaeological Office (North Province), Dept. of Archaeology, MNH
Priyantha Jayasingha	District Officer	Regional Archaeological Office (East Province), Dept. of Archaeology, MNH
P G Wikramasingha	Research Assistant	Regional Archaeological Office (North Province), Dept. of Archaeology, MNH
Suranga Perera	Research Assistant	Dept. of Archaeology, MNH
Ranga Coony	Research Assistant	Dept. of Archaeology, MNH
Wijebondara	Archaeology Assistant	Regional Archaeological Office (North Province), Dept. of Archaeology, MNH
V Sivaruby	Development Officer	Regional Archaeological Office (North Province), Dept. of Archaeology, MNH
T Getsy	Development Officer	Regional Archaeological Office (North Province), Dept. of Archaeology, MNH
Senarath Wickramasinghe	Deputy-Director	The Colombo National Museum
Ranjith Hewage	Museum Keeper	The Colombo National Museum
Leelananda Prematilleke	Emeritus Professor	University of Peradeniya
Prashnatha B Mandawala	Professor and Head	University of Sri Jayewardenepura
P Pushparatnam	Senior Lecturer	University of Jaffna
Shanthini	Senior Lecturer	University of Jaffna
石塚英樹	公使	在スリランカ日本大使館
笹井大嗣	一等書記官	在スリランカ日本大使館

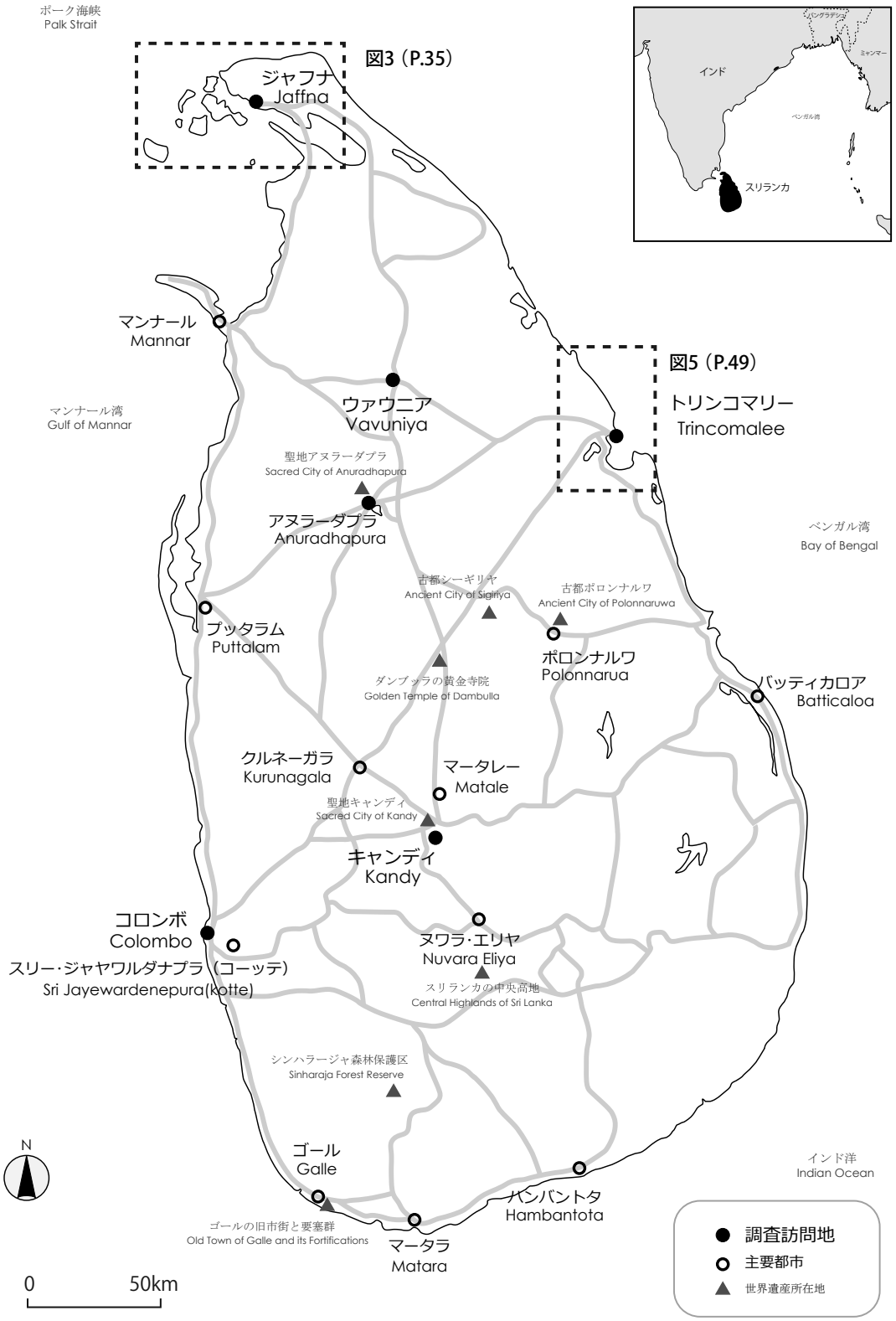

ポーク海峡
Palk Strait
図3（P.35）
ジャフナ
Jaffna
インド
ベンガル湾
スリランカ
マンナール
Mannar
図5（P.49）
トリンコマリー
Trincomalee
マンナール湾
Gulf of Mannar
ウァウニア
Vavuniya
聖地アヌラーダプラ
Sacred City of Anuradhapura
アヌラーダプラ
Anuradhapura
ベンガル湾
Bay of Bengal
古都シーギリヤ
Ancient City of Sigiriya
古都ポロンナルワ
Ancient City of Polonnaruwa
プッタラム
Puttalam
ポロンナルワ
Polonnarua
ダンブッラの黄金寺院
Golden Temple of Dambulla
バッティカロア
Batticaloa
クルネーガラ
Kurunagala
マータレー
Matale
聖地キャンディ
Sacred City of Kandy
キャンディ
Kandy
コロンボ
Colombo
スリー・ジャヤワルダナプラ（コーッテ）
Sri Jayewardenepura(kotte)
ヌワラ・エリヤ
Nuvara Eliya
スリランカの中央高地
Central Highlands of Sri Lanka
シンハラージャ森林保護区
Sinharaja Forest Reserve
N
ゴール
Galle
インド洋
Indian Ocean
ハンバントタ
Hambantota
ゴールの旧市街と要塞群
Old Town of Galle and its Fortifications
マータラ
Matara
0
50km
調査訪問地
主要都市
世界遺産所在地

図 1.　スリランカ全体図

2. スリランカにおける文化財保護と国際協力

2–1. 国内の体制

北海道の約0.8倍の広さほどの国土のスリランカには、約10万の文化遺産があると言われている。スリランカの多様な文化遺産は植民地時代から人々を魅了し、時代に翻弄されながらも各地で専門家による発掘、保護、調査が進められてきた。1980年にはユネスコ世界遺産条約を受諾し、2014年現在で以下、8件の資産が世界遺産一覧表に記載されるに至っている（うち2件は自然遺産）[1]。

1982年：聖地アヌラーダプラ、古都ポロンナルワ、古都シーギリヤ

1988年：シンハラージャ森林保護区、聖地キャンディ、ゴールの旧市街と要塞群

1991年：ダンブッラの黄金寺院

2010年：スリランカの中央高地

なかでも1982年に国内初の世界遺産に登録された上記3件の遺産は、「文化三角地帯」プロジェクトの成果として国際的な注目を集めてきた。1977年の政権交代をきっかけに、国内の文化財行政を司る考古局は、当時ユネスコの遺跡保存専門家であったセンブクティアーラチラゲ・ローランド・シルワ（Sembukuttiarchilage Roland Silva）氏を中心に、ユネスコに対しスリランカの文化財保護に対する支援（資金面、考古遺跡の保護管理システムの確立）を求めるキャンペーンを展開した。その結果1980年には「ユネスコスリランカ文化三角地帯プログラム」が立ち上げられ、アヌラーダプラ、ポロンナルワ、シーギリヤ、ダンブッラ、キャンディの各地で保全計画が実行に移された。さらにはこれらの事業の資金を管理する団体として、中央文化基金が1980年に設立されるに至っている。

現在、スリランカにおいて、文化財保護に関わっている省庁は国家遺産省と文化芸術省である。両省は政権交代等の影響により合併、分離を繰り返してきたが、2010年以降はそれぞれ独立した省を編成している。両省の管轄下におかれる機関は図2のとおりで、このうち、有形の文化財の保護に関する方針を決め、国家の文化財管理の中心を担っているのは考古局である。また博物館に関しては考古局管轄のものと国立博物館局管轄のものに分かれており、トリンコマリー海軍海事史博物館のように同じ施設内であっても展示内容によって監修する部局が異なるケースもある。

考古局は1890年の英領植民地時代に創設され、旧宗主国の考古学者を中心に進められていた発掘調査および踏査活動をその前身とする。現在の考古局は表5に記載の8部門に分かれており、部門別に各活動が実施されている。現在は2006年に発表された指針に基づき、文化財保護に取り組んでいる。

図 2.　国家遺産省と芸術文化省管轄下の機関

1　2006 年には「セールウィラ・マンガラ・ラージャ・マハー・ウィハーラ」、2010 年には「セールウィラからスリーパーダ（聖なる足跡の寺院）へのマハウェリ川に沿った古代巡礼路」が暫定一覧表に記載されている。

国内には9の地域支部、6の巡回拠点、7の遺跡事務所があり、各地域支部の代表は考古局長補佐という肩書きで職務を遂行している。本調査で協力を得た北部支部には、2014年2月調査時に17名の職員が在職、うち5名は近年他の地域から異動してきており、現地採用の職員の人材育成を行なっている。また、ジャフナで進行中のジャフナ・フォートの修復事業には75名の作業員が従事している。トリンコマリーでは2014年5月時点で1名の考古局職員が地域に常駐しており、随時各遺跡を巡回し、現地作業員と管理を行なっている。

スリランカにおける文化遺産保護に関する現行の法律は1940年の古物保存法（Antiquities Ordinance）[2] を基盤としており、1956年、1998年に改正を重ねてきた。同法は「古物の所有権、古物の発掘、史的記念物、考古学保護区、古物の輸出、助言委員会、考古局長の権限と任務、その他」の8項目で構成されており、同法に関連する条例もいくつか発布されている。文化財の規定に関する条項は同法16条から19条に定められている。同法第16条（1）において、キャンディ王国が英国に滅ぼされ、条約を締結した1815年3月2日よりも前に存在していた、あるいは存在していたとされる記念物は史的記念物とみなすと規定されている。また、17条では樹木を史的記念物に指定することに関する規定、第18、19条では私有地にある史的記念物が破壊、略奪、放置等の行為により危険にさらされており、保護する必要があると認識されている場合、史的記念物は保護記念物（Protected Monument）に指定され、考古局により保護措置が講じられると規定されている。

部門	任務
踏査と ドキュメンテーション	・目録作成と文書化 ・保護 ・調査研究 ・上記項目に関する外部委託のプロジェクトの監視
発掘調査	・緊急／救済発掘（例：埋蔵文化財影響評価の結果を受けての調査） ・学術発掘 ・国民の要求に応じるための例外的な発掘調査（例：宗教的、美的な観点） ・発掘についての分析、報告書作成、過去のプロジェクトのアーカイヴ化 ・遺物の一時保管施設の改善 ・最終的な保管と展示のための遺物の博物館分館への移動 ・外部委託プロジェクトの監視
博物館	・コレクションの目録作成とコンピュータ化 ・コレクションの保管環境と利用方法の改善 ・再編成と再組織化 ・展示の質の向上 ・考古学的遺産への一般市民の関心の向上 ・一般への研究施設の提供
建築の保存と遺跡の公開	・遺跡／記念物の初期保存 ・遺跡／記念物の初期修景 ・文書の保管方法と利用方法の改善 ・外部委託プロジェクトの監視
科学的保存	・初期保存 ・予防保全と状態の監視 ・保存部門に提出された遺物の目録作成、記録の更新と電子化 ・調査研究（例：年代測定、古代の技術） ・外部委託プロジェクトの監視
碑銘研究と貨幣学	・碑文：碑文の目録作成、破損／紛失した碑銘の複製と交換、複製の体系的保管、調査研究 ・貨幣：貨幣の目録作成、体系的保管、調査研究
記念物の整備	・保護 ・整備と予防保全：危機的状況にある遺跡／記念物、考古学的な保護区、総合的整備／道路／標識／ビジターセンター、博物館建設
一般向けサービス	・一般との関係構築 ・考古学的遺産への一般の関心の向上 ・政府との連携－公共機関／大学 ・研修の運営共同訓練－ローカル／インターナショナル ・図書館とその活動 ・写真部門－目録化／デジタル化／写真アーカイヴ管理 ・記録アーカイヴ

表 5.　スリランカ考古局の部門別ミッション

2　正式名称は「スリランカの古物、およびスリランカにおける歴史的あるいは考古学的価値の高い遺跡や建造物のより良い保護のための法律（An Ordinance to provide for the better preservation of the antiquities of Sri Lanka, and of sites and buildings of the historical or archaeological importance in Sri Lanka）」。

平成25年度、26年度の調査時にはジャフナ、トリンコマリーの遺跡のいくつかに写真4、5のように、考古学的遺跡（Archaeological Monument）であることを示す三言語併記の看板が設置されていた。また、考古学的保護区域には写真6のような看板が設置され、近隣や訪問者に対し区域内における禁止事項を明示している。

【参考】
Central Cultural Fund < www.ccf.lk./ >
Department of Archaeology < www.archaeology.lk/ >
Ministry of National Heritage < http://www.heritagemin.gov.lk/web/?ui=desktop >

写真 4.　遺跡前に設置された看板

写真 5.　遺跡付近の道路沿いに設置の看板

写真 6.　保護区域内での禁止事項を明記する看板

2–2. スリランカの文化財保護に対する国際協力状況

前節に既述のとおり、スリランカは1970年代末に国際社会に自国の文化財の窮状と保護に対する支援の必要性を訴えて以来、国際機関はもとより日本、オランダ、米国等からの援助を受け、文化財の保護を推進してきた。本節ではスリランカに対する文化財保護に関する外国からの支援について、近年の動向を中心に紹介する。

■日本による協力

文化遺産国際協力コンソーシアムでは、世界各国における日本の文化遺産協力事業の情報を収集し、データベースを作成している[1]。このデータベースによると、日本がスリランカに対し実施した文化遺産保護事業は表6のとおりである。

日本はこれまで、ODA として 1979 年以来機材供与を中心にスリランカの文化財保護に関する支援を行なうだけでなく、1990 年代にはユネスコ文化遺産保存日本信託基金事業として、キャンディのマルワッタ僧院遺跡の修復事業を行なった。近年では JICA によるシーギリヤ博物館建設に向けた支援（2009 年 7 月に開館）や、2013 年には公益

1　データベースはコンソーシアムウェブサイト内の会員向けサイトで公開されている。http://www.jcic-heritage.jp/sns/user/index.html?

日本による支援事業				
事業名称	出資元	金額※	実施団体	実施期間
古代仏教遺跡への遺跡修復保存用建築用足場・製図類	外務省 ODA・一般文化無償	5,000万円	―	1979
文化省への仏教遺跡修復機材	外務省 ODA・一般文化無償	4,500万円	―	1980
文化保存機材	外務省 ODA・無償資金協力	3,200万円	―	1981
文化省への遺跡保存機材	外務省 ODA・一般文化無償	4,500万円	―	1982
文化省への遺跡保存機材	外務省 ODA・一般文化無償	5,000万円	―	1983
アジアにおける建築設計方法の基礎的研究―スリランカ・クォードラングル地区遺構と設計方法	公益財団法人トヨタ財団	200万円	早稲田大学アジア建築研究会	1983
アジアにおける建築遺構の修復手法の基礎的研究―スリランカ・ポロンナルワ・クォードラングル地区遺構の復元と修復	公益財団法人トヨタ財団	790万円	早稲田大学アジア建築研究会 （早稲田大学理工学部）	1984
アヌラダプラ都城部の考古学プロジェクト：遺物の整理・研究と報告書の作成	公益財団法人トヨタ財団	10,000米ドル	ペラデニア大学考古学科	1990
コロンボ国立博物館図書館へのマイクロフィルム機材	外務省 ODA・一般文化無償	4,770万円	―	1997
インド洋津波によるスリランカの文化遺産被災状況調査と復興ガイドラインの作成―世界遺産都市ゴールと南部沿岸の歴史的都市の被害状況の解明―	文部科学省 特別研究促進費		筑波大学大学院人間総合科学研究科	2004
シーギリア博物館の建設	外務省 貧困農民支援（2KR）の見返資金	3億2,000万円	―	2006
シーギリア博物館展示機材整備計画	外務省 ODA・一般文化無償	1億7,000万円	―	2007-2008
シーギリヤにおける地域主導型観光振興プロジェクト	JICA 有償技術協力	3億2,000万円	中央文化基金 経済開発省	2008- 2011
南インドからスリランカへの民族移動の複合的説明を含む国と地域の地理（地誌）に関する貝葉文書の収集、翻字および翻訳	公益財団法人トヨタ財団	210万円	スリランカ民族学国際センター 民間財団	2009
木造建造物の保存に関する集団研修	文化庁		ACCU奈良	2013
紛争後の国家における危機に瀕する伝統的手工芸	文部科学省		アジア太平洋無形文化遺産研究センター	2013-

UNESCOを通した日本の援助			
案件名	資金元	金額	実施期間
マルワッタ僧院遺跡	ユネスコ文化遺産保存日本信託基金	226,300米ドル	1990-1996
アジア太平洋地域における国のキャパシティの強化を通じた無形文化遺産の保護（対象国：ブータン、カンボジア、モンゴル、ネパール、PNG、サモア、スリランカ、東ティモール）	ユネスコ無形文化遺産保護日本信託基金	1,020,484米ドル	2011-2014

※金額は、一般公開されているもののみ記載した。

表 6.　スリランカを対象とする日本の支援事業

財団法人ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所（ACCU 奈良）により、スリランカ考古局中央支部にて木造建造物の記録や調査方法、保存管理計画の立案に関する集団研修が実施されている。なお、今回調査の対象地域であったスリランカ北部、東北部に対しては、2009 年の内戦終結以降、JICA が中心となりインフラ、農村開発の分野での協力事業を実施しているが、有形文化財の分野における支援の実績は未だ実現していないのが現状である。

無形文化遺産の分野では、スリランカは 2008 年にユネスコの無形文化遺産保護に関する条約を批准し、それ以来、主にユネスコの支援を受けながら文化芸術省を中心に保護体制の整備や目録作成に取り組んでいる。2012 年からは無形文化遺産保護日本信託基金の「アジア太平洋地域における国のキャパシティの強化を通じた無形文化遺産の保護」事業の支援対象国の一つとして、文化芸術省を対象に目録作成やユネスコの一覧表への記載申請に向けたワークショップを実施している。また、アジア太平洋無形文化遺産研究センター(ユネスコカテゴリー 2 センター)は 2013 年度より、「紛争後の国家における危機に瀕する伝統的手工芸」と題し、紛争終結地域における生活再建支援のために早急に保護が必要とされる無形文化遺産の特定を目的とするプロジェクトを実施している。

■日本以外の国による協力

2014 年現在、スリランカの文化遺産保護の分野での主要な協力国は米国とオランダである。米国は 2001 年に創設した文化保護のための米大使基金（Ambassador's Fund for Cultural Preservation [AFCP]）プログラムのもと、スリランカに対しこれまで以下の 7 事業を実施している。

- 津波被害後におけるマータラ港内部文化財の調査
- 世界遺産の古都アヌラーダプラの僧院に関するドキュメンテーション
- バッティカロアのオランダ港保存に向けての調査、ドキュメンテーション、建築作業
- 世界遺産ゴール港内部の歴史的建造物の包括的なドキュメンテーション
- 世界遺産と国立博物館の工芸品の保存
- バッティカロア港の建造物 B の保存修復とバッティカロアにおける多民族・多宗教共同体に向けた文化資源管理センターの創設
- 考古的保存区のラジャガラ僧院内部における古代モニュメントの包括的保存

オランダは在コロンボオランダ王国大使館が中心となり支援、NPO 法人国際遺産活動センター（Centre for International Heritage Activities）が現地機関との連携、情報収集を行ないながら文化遺産保護に関わっている。同センターによると、スリランカに対するオランダの協力事業はこれまでに 80 件以上にのぼるが、特にオランダは 2004 年の津波被害を受けた南スリランカ（ゴール、マータラ、カツワナ）の文化遺産復興への支援に 2007 年より力を入れており、国家遺産省と中央文化基金は共同でマスタープランを作成し、南部の「文化三角地帯」のコンセプトを形成した。その他、ポロンナルワのサイトミュージアムやゴールの水中考古博物館の設立、また今回調査を行なったジャフナ、トリンコマリーでもジャフナ・フォート（写真 7）やトリンコマリー海軍海事史博物館を対象に、内戦終結直後から協力事業を実施している。

写真 7.　ジャフナ・フォート修復に対するオランダの支援額を示す看板

日本、米国、オランダ以外からの協力実績としては、例えば中国はアバヤギリのサイトミュージアム、ノルウェーはジェータワナのサイトミュージアム等の事業で協力を行なっている。水中考古遺跡の分野ではオーストラリアの大学や博物館との共同調査がすすめられ、2007 年にはゴールでユネスコ、イクロム主催のフィールドスクールを実施する等、国際的な連携を軸に同分野の底上げがはかられている。

【参考】
Cultural Heritage Protection Cooperation Office, Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO, Agency for Cultural Affairs, Japan, *The Workshop 2013 for Protection of Cultural Heritage in Kandy, Sri Lanka,* 2013, ACCU.
Centre for International Heritage Activities < www.heritage-activities.nl >
United States Support for Sri Lankan Cultural Preservation < http://srilanka.usembassy.gov/pr-8aug14.html >
文化遺産国際協力コンソーシアムデータベース < http://www.jcic-heritage.jp/sns/user/index.html? >

3. 北部、東北部における文化遺産と地域開発

2014年2月17日のセナラト・ディサナヤカ（Senarath Dissanayaka）考古局長からの聞き取り調査で、考古局では内戦終結後の文化財保護と観光開発の連携を模索中であること、またその実現に向けてジャフナとトリンコマリーでは歴史的建造物を文化複合施設として再活用する計画があるとの情報を得た。これらの計画には国家遺産省のコンサルタントをつとめるマンダワラ教授が関与しており、2月20日には同教授より実際にジャフナの旧庁舎を視察しながら計画内容の説明を受けた。また、続く5月20日の面会時には旧ジャフナ庁舎の修復作業の進捗状況について情報提供を受けた。本章ではまず、すでに修復作業が完了しているトリンコマリーでの先行事例（トリンコマリー海軍海事史博物館）を取り上げ、その後同じモデルにならい事業化をすすめているジャフナの旧庁舎再活用の計画について、調査で得た情報をもとに説明する。

3–1.
トリンコマリー海軍海事史博物館
Naval and Maritime History Museum Trincomalee　　地図：P.49 図 6 ❷
北緯 8 度 34 分 12 秒、東経 81 度 14 分 13 秒

スリランカ東北部、ベンガル湾に面した港湾都市トリンコマリーは、入りくんだ地形と規模の大きさから、世界でも有数の天然の良港として知られる。17世紀以後、スリランカに進出したポルトガル、オランダ、フランス、英国のいずれもこの地に海軍をおいた。現在もスリランカ海軍が駐留する。

海軍海事史博物館はまさに当地の歴史を象徴する施設といえる。建物は17世紀のオランダ統治時代に建造された海軍コミッショナーの邸宅を再利用したもので、ダッチ湾の青い海と白い砂浜が目前に広がる地に、2階建ての白亜の植民地風建物がそびえ立っている。

すでに廃墟と化していたこの建物を博物館に利用する計画は、2007年から2008年にかけて立案された。土地の所有者はスリランカ東部大学（Eastern University of Sri Lanka）であった。危険な建物を取り壊す提案もあったが、スリランカ考古局はこれに同意せず、建物の保存を目指した。2009年より修復が始まり、2014年2月には博物館として再建され、同年5月より一般公開が始まった。

建設のためのコンセプト作りはスリランカ考古局が担当し、資材の提供や管理も同考古局が担っている。改修の際は、本来の建築、意匠をできる限り留めることを原則としていた。興味深いのは、実際に修復作業にあたったのが海軍という点である。今回の調査中に改修工事中であったアヌラーダプラ考古博物館（第6章参照）では、改修の実作業に陸軍が当たる等、スリランカの公共事業における軍の協力関係がうかがわれる。

本事業は、在スリランカのオランダ大使館の協力によるオランダ政府の援助によって行なわれた。オランダの援助額は7500万スリランカ・ルピー（Rs.、以下「ルピー」と表記）[1]で、展示に関わる制作費は約50万ルピーであったという。

展示室は、1階（約766㎡）は人文科学系で、海軍の歴史、水中遺産、対外交易をテーマとし、2階（約707㎡）は自然科学系で、生物多様性に関連する水中生物等を紹介する。1階を考古局、2階を博物館局が監修した。この他、建物の修復過程を示す写真パネルや、100名程度を収容する講堂を備える。ジオラマやパネルを多用した展示で、スリランカ全般の海中考古学、造船技術の進化、海事技術の進化、戦争・商業利用、海洋環境等を概観する。建設にあたり、タイのチャンタブリー国立海事博物館を参考にしたという。

建物の復元と博物館の開設にあたって、考古局はこの事業の価値を以下のように評価している。

(1) オランダ統治時代の行政長の建物としての歴史的価値。
(2) 17世紀のオランダ建築としての建築的価値。

1　1 スリランカルピー≒ 0.9 円（2014 年 12 月時点のレート）

(3) 古代の要塞や海岸、現在の行政の中心地に近いという地勢の価値の高さから、観光客の来訪によって期待される収入増といった経済的価値。
(4) 3層の煉瓦積みの床や材木による梁の構造という素材・技術的価値。
(5) 回廊をもつ外観や窓・扉の形の芸術的価値。
(6) スリランカ東部地区のランドマークとしての象徴的価値。

なお、観覧者としてスリランカ人のみならず外国人観光客も視野に入れている。また、海事に関する知識を提供することによる教育的な効果も期待されている。開館から間もない本博物館は、スリランカ考古局のホームページでも、現在進行中の主要な建築保存活動の1つに挙げられている。

【参考】

"Sri Lanka President opens Naval and Maritime Museum in Trincomalee", *SL Time, ColomboPage News Desk*, Feb 3, 2013 <http://www.colombopage.com/archive_13A/Feb03_1359913870CH.php>

写真 8.　1 階展示室

写真 9.　1 階展示室

写真 10.　1 階展示室 (海軍関連)

写真 11.　2 階への階段と階段下の展示

写真 12.　2 階ホール（博物館の修復過程を写真展示）

写真 13.　2 階柱廊（修復前の柱を一部残している）

3–2.

ジャフナの文化複合施設―ジャフナ新博物館・情報・活動センター建設計画―
Museum, Information and Activity Centre of Jaffna

地図：P.35 図4❸

北緯9度39分3秒、東経80度1分48秒

内戦終結後の2009年を境に『ロンリー・プラネット』や『地球の歩き方』等旅行関連書籍にもスリランカ北部・東部の項目が見られるようになり、2014年現在、地域復興に向けてインドや中国の企業進出が進む中で、北部のジャフナでも徐々に国内外からの観光客が戻り、観光業も活気を取り戻しつつある。2013年3月の調査時には観光案内所はまだ確認できず、一部のホテルがジャフナの主要な文化遺産を廻るツアーを実施しているに過ぎなかったが、2014年2月および5月には海外からの観光客の姿もみられた。特にジャフナでは、後述するジャフナ・フォートの南側の入口に通じる内部空間に、観光案内所として周辺の歴史的建造物や発掘中の遺構を紹介するパネルを展示した部屋が設けられている。

このような状況下で、現在進行中であるのが、かつて地方長官の庁舎（Regional Commissioner's office、現地ではKachcheri Buildingと称する）として使用されていた建物を活用した文化複合施設構想である。同事業は、マンダワラ教授が立案計画したもので、文字通り、歴史的建造物である旧庁舎を博物館や情報・文化活動の拠点として活用しようとするものである。同事業には、考古局の北部支部、ジャフナ考古博物館、ジャフナ大学歴史学部P・プシュパラトナム（P Pushparatnam）教授他が現在関わっているが、同事業の実現にはこれらの機関のみならず、ジャフナの多様な文化を伝承してきた人々の支援も必要不可欠である。この歴史的建造物を活用した文化複合施設構想は、同じくマンダワラ教授のもとで実施された先述のトリンコマリーにおける海軍コミッショナーの邸宅を再利用したトリンコマリー海軍海事史博物館事業を先行例として、「保存適応再利用プロジェクト（Conservation and Adaptive Reuse Project）」のひとつに位置付けられている。この事業は、ヴェニス憲章「記念建造物および遺跡の保全と修復のための国際憲章」（1964年）第5条に掲げられる「記念建造物の保全は、建造物を社会的に有用な目的のために利用すれば、常に容易になる。それゆえ、そうした社会的活用は望ましいことではあるが、建物の設計と装飾を変更してはならない。機能の変更によって必要となる改造を検討し、認可する場合も、こうした制約の範囲を逸脱してはならない。[1]」に基づく構想である。

修復計画は2011年にスタートしたというが、2013年3月の調査時は具体的な事業内容は確認できなかった。しかし、2014年2月の調査時には、文化複合施設としての具体的な構想が明確に提示されており、5月の時点ではマンダワラ教授の所属する大学の学生を中心として、旧庁舎のドキュメンテーションを作成していた。なお、マンダワラ教授が提示する本事業の予算総額は、およそ2億3428万ルピー（税抜）である。

以下、旧庁舎の現状報告、保存修復・再利用の目的、施設内部について概要を述べる。

(1) 建物の形状と歴史

旧庁舎は、ジャフナ中心部から東に1.5kmほどの地点にあり、国道A9に面し、A9を挟んだ対面には、現在の地方庁舎が立っている。当初の建物はオランダ統治時代に遡るというが、現在の建物は英国統治時代に建設されたもので、隣接する現在のオールド・パークの土地を1829年に購入し、邸宅や庭園等を整備した英国人地方長官P・ダイクと同時代と見られている。建物1階北側には英国統治時代に刑務所として使用された区画も残る一方で、内戦中はLTTEが建物を占拠していたことから、政府軍との激しい交戦による無数の砲撃の痕跡が壁や柱に残っている。2011年に考古局の管轄する考古遺産として登録された。2013年には建物のいたるところで植物による被害が見受けられたが、2014年にはその多くが除去されていた。

建物は、図面でみるように入口部分の突出部を除いて楕円形を呈しており（写真14）、中央には広い中庭がある。当初は2階建ての建物であった。資材としては、煉瓦のほか、ジャフナ地域や島嶼部の建築に多用され

1　日本イコモス国内委員会訳（http://kodomo.bunka.go.jp/1kokusai/pdf/nara_VC_j.pdf）を参照した。

るコーラル・ストーン（珊瑚石）を使用している。建築内部の建材として用いられた木材は残念ながら現存しない。このほか、1階の床材にはタイルのほか、オランダ統治時代および、続く英国統治時代の陶片がモザイクタイル状に貼られ、往時を偲ばせている。建築的には、半円形のアーチや円形の列柱、さらに正面玄関の突出部上方には欄干つきのベランダというネオ・ルネッサンス様式と、バラ窓を用いるネオ・ゴシック様式の特徴を兼ね備え、加えてジャフナ地域特有のコーラル・ストーンの活用によって、当時のヨーロッパの建築様式と北部地域の建築の融合を見ることができる。

(2) 保存修復および再利用の目的

・植民地時代の建造物の保存修復プログラムの一環として実施する。
・歴史的・考古学的証拠をもとにした修復を前提として活用する。（ヴェニス憲章第5条として。前頁を参照。）
・博物館、情報、種々の文化活動を提供する場として、北部地域にみられる多様な文化遺産（仏教、ヒンドゥー教、タミル民族、植民地［オランダ、英国］時代）に関する情報を1つの場所に集約し、異文化理解を目指す。
・北部地域の歴史を物語る多様な民族と多文化・多宗教が共存してきた状況を提示する。
・北部地域の文化遺産観光を促進する拠点となることを目指す。
・新しい施設の収益は北部地域の遺跡の保存修復資金に利用する。

(3) 新文化複合施設の内部構成（マンダワラ教授の構想に基づく）

1階：ジャフナ博物館、収蔵庫、工芸ワークショップ、写真展示、ラボ、レストラン
（1階は英国統治時代の刑務所として使用されていた部屋も往時の資料として活用）
2階：講堂、案内所※、オフィス、会議室
中庭：野外劇場（無形文化遺産の実演をする場所）
※2階の案内所で提供する文化遺産のアーカイヴの作成には、先進的なデータベースの作成技術を有するコロンボ大学コンピュータ学部の学生が担当する。特に、昔の街並みの再現に当っては、既存のガラス乾板やマイクロフィルムデータを活用し、データベースと統合する予定とのことである。

(4) 本事業によって予想される効果

・国内外の観光客のいずれに対しても教育的効果が期待される。
・国内外の観光客が、文化複合施設によって周知の観光資源だけでなく、ジャフナの歴史的文化遺産に興味を持ち、足を運ぶようになる。
・文化複合施設として利用されることにより、長期的に本建造物が保存活用される。

なお、この計画に先立って、政府は交通網を中心にインフラ整備を急いでいる。コロンボ方面とジャフナを結ぶ道路建設により同区間は約100km短縮され、内戦によって破壊された駅舎や線路の再建によりコロンボ～ジャフナ鉄道路線が2014年10月に開通した。これらの完成によって、ジャフナへの往来が容易となり、観光客の増加も期待されている。

以上のように、植民地時代の象徴であり、LTTEの占領下でも使用された建造物を文化複合施設として再利用する事業が現在進行している。ジャフナの多宗教・多文化を育んできた文化的記憶の場として、人々が多文化共生を理解し、それを望むように促す場となることを期待したい。

【参考】
Department of Archaeology Sri Lanka, *Conservation and Restoration of the Ancient Kachcheri Building and Conversion it to the Museum, Information and Activity Center of Jaffna: Conservation and Adaptive Reuse Project Proposal*, 2014.

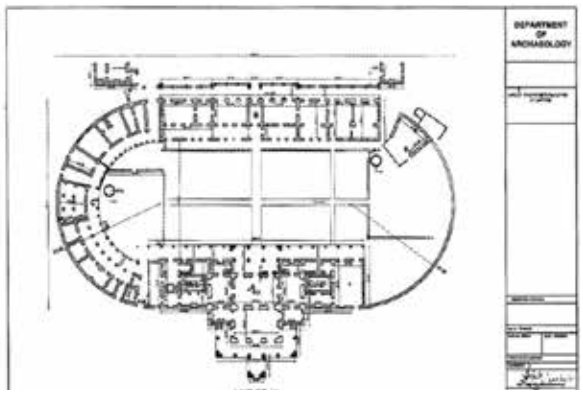


写真 14.　建物の平面図

写真 15.　隣接する大通りからの外観（裏側）

写真 16.　植物の被害

写真 17.　崩落した壁の一部

写真 18.　英国統治時代の刑務所址

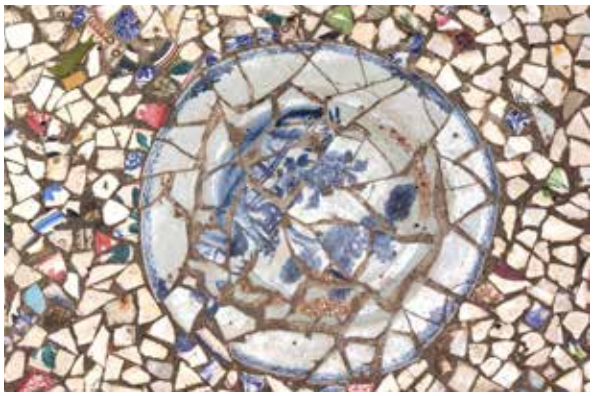


写真 19.　オランダ領時代の陶器を再利用したモザイク床面

写真 20.　銃痕の残る壁面

写真 21.　中庭に面した回廊

4. 北部、東北部の博物館

本章では平成26年度に行なったジャフナ考古博物館の現状や課題に関する調査を中心に、ジャフナ大学歴史学科K・インドラパーラ博士考古博物館、閉館中であったが視察の機会を得たトリンコマリー考古博物館、および近年開館したセールウィラ考古博物館の現状についても併せて報告する。

4–1. ジャフナ

ジャフナ考古博物館
Archaeological Museum, Jaffna

地図：P.35 図 4 ❹
北緯 9 度 40 分 8 秒、東経 80 度 1 分 2 秒

ジャフナ考古博物館は、ナルール・カンダスワーミ・コーウィルからテンプル・ロードを南に下り、ナヴァラール・ロードを西に300mほど入った地点に位置する。

展示施設は、煉瓦およびコンクリート製の建造物で、外壁には北部地域にみられるパルミラヤシの意匠が浅浮彫でデザインされている。天井を支える支持体は主に木材を使用している。中庭を取り囲むように、廻廊のごとくいくつものギャラリーが並ぶ。そのうちいくつかは外側へ突出するかたちでギャラリーが設けられている。外光は、

写真 22.　仏教関連の展示室

写真 23.　ヒンドゥー教の展示物

写真 24.　三言語のキャプション

写真 25.　館内の様子

写真 26.　生活道具の展示

写真 27.　展示ケース

写真 28.　台帳

写真 29.　中庭での展示

博物館入口と中庭に面する2つのギャラリーの扉からのみで館内はほの暗い。中庭や建造物の周囲には小奉献塔やオランダ時代の墓石、鯨の骨が置かれ、後述する展示内容にもあるように考古遺物に限らず、幅広い民俗資料によって構成される。なお、収蔵庫はなく、展示室と同様の小部屋がひとつ、館長室として使用されている。このほか、入口近くに、スリランカの考古遺物保存を目的として国家遺産省および考古局が設置した古物管理基金（Antiquity Management Fund）と記された募金箱がある。

展示内容は、石造彫刻（仏教、ヒンドゥー教）（写真22、23）、ビーズの装飾品、コイン、象牙、鉄製品、人形、陶磁器、木製品、石碑（オランダ時代～英国統治時代）等が並ぶ。仏教彫刻はジャフナから10kmほどの地点にあるカンタロダイ（第5章参照）や、湧き水で有名なニラワライ、また内戦中の激戦地のひとつとして知られるキリノッチ出土のものを中心とする仏陀像や菩薩像のほか、欄楯浮彫やストゥーパの部材等がある。一部ポロンナルワ時代のものも含まれるが、概ねアヌラーダプラ時代と見られる。ヒンドゥー教彫刻は近世のもので、タミルのヒンドゥー教文化を示す貴重な資料といえる。

展示物のキャプションは、シンハラ語、タミル語、英語の三言語で表記されている。また、博物館紹介やジャフナの地図、年表、遺跡や寺院、祭礼等を紹介するパネル等はまだ十分に整っていない。

2014年の調査時に、20世紀初頭に作成された遺物台帳（写真28）を調査した。アシスタント・キュレーターであるT・ゲッツィー（T Getsy）氏が、旧台帳をもとに収蔵品と照合し、収蔵番号の振り直し、法量計測等基本データの整備をすすめており、我々もデータ管理の方法について助言、指導した。すでに第3章に述べたように、旧庁舎を再利用した文化複合施設の構想が進んでおり、現在のジャフナ考古博物館もこの新しい施設に移転することが予定されている。

ジャフナ大学歴史学科Ｋ・インドラパーラ博士考古博物館
Dr. K Indrapala Archaeological Museum, Department of History, Jaffna University

地図：P.35 図４❼
北緯９度41分７秒、東経80度１分23秒

ジャフナ大学は北部の名門校である。考古学を学ぶ学生が所属するのが、人文学部歴史学科考古学専攻（2003年設置）で、現在は学部のみ、学生数は20名である。本専攻における研究対象は、紀元前からの2000年以上の歴史を有するジャフナ半島の文化遺産の保護に重点を置き、遺産管理やメディア・文化ツーリズムといった科目も設けている。その一方で、大学は内戦以前から独自に北部地域の発掘を行ない、2010年以降はスリランカ考古局の支援を受けつつ、発掘事業を展開している。また、現役の学生がジャフナ・フォートの修復事業に実習として関わっているほか、北部地域の文化遺産のデータベースを作成しているという。今後の展望としては、専攻の学生が文化遺産の保存修復を学ぶのに、大学内に専用の設備を備えたラボを設置し、学習環境を充実させたいという。

プシュパラトナム教授は、学部提供科目にもあるように文化遺産学や観光学等幅広い視点から主として30の文化遺産を取り上げ、2014年調査時には*"Tourism and Monuments of Archaeological Heritages in Northern Sri Lanka"*と題する単著を準備中であった（英語、2014年9月刊行、今後、タミル語・シンハラ語でも出版予定）。

ジャフナ大学歴史学科附属Ｋ・インドラパーラ博士考古博物館は、紀元前～近代のコインコレクションのほか、ジャフナから出土したヒンドゥー教の神像彫刻が収蔵される。収蔵品はすべて大学帰属である。考古遺物は、1989年から

写真 30.　館内の様子

写真 31.　石像彫刻の展示

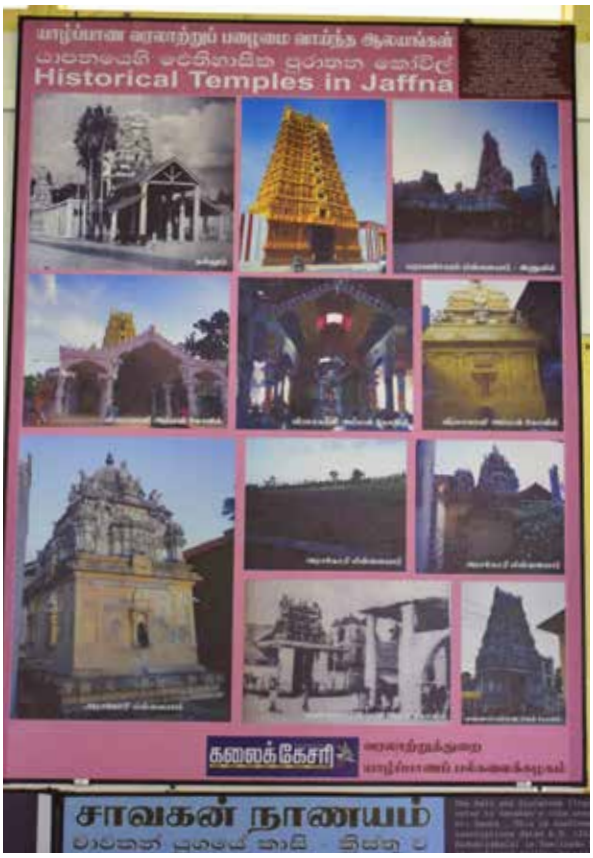


写真 32.　パネル展示

2004年の調査で発見したものが多く、考古局、中央文化基金からの寄贈のほか、個人の寄贈のものも含まれる。また、ジャフナ地域の重要な遺跡を仏教、ヒンドゥー教を問わずパネルにして写真と文（英語）で紹介している（写真32）。すでに述べたように仏教遺跡は別として、ヒンドゥー教寺院は必ずしも創建の古いものばかりではないが、半島内にみられる各寺院を丁寧に挙げており、小規模ながらジャフナの考古遺物やパネルから同地の歴史が概観できる。

同博物館は、大学内の建物の庭に面した部屋を博物館として使用しており、ジャフナ考古博物館と比べ、床面積も小規模で、収蔵品数も極めて少ないが、充実した資料展示となっている。

4–2. トリンコマリー

トリンコマリー考古博物館（閉館中）
Trincomalee Archaeological Museum

地図：P.49 図 6 ❶
北緯 8 度 34 分 1 秒、東経 81 度 13 分 57 秒

海軍海事史博物館から南西に約1km、半島の西側、内港（Inner Harbor）に面して、かつて考古博物館として用いられていた建物がある。建物はオランダ統治時代に遡るもので、博物館は1987年に開館したが、1989年に内戦の影響で閉鎖となった。その後、地区の行政機関の事務所（Divisional Secretariat）として使用され、現在は警察がこの施設の管理を兼ねて居住している。建物内には仏像をはじめとする文化財が今なお残置される。内部は荒廃して

写真 33.　館内に残置された仏像

写真 34.　館内の様子

写真 35.　館内天井

写真 36.　博物館ファサード部分

おり、保存環境は決して良好でない。博物館の開館時には博物館局の管轄であったが、現在は考古局へ移管されている。

スリランカ考古局によれば、この建物の修復も計画しているとのことだが、現状では具体的な財源がなく、実施の時期は決まっていない。考古局は修復予算を1700万ルピーと試算している。新しい施設では有形・無形の文化財を紹介する方向で検討しているという。

セールウィラ考古博物館
Archaeological Museum Seruvila

地図：P.49 図 5 ⓬
北緯 8 度 22 分 22 秒、東経 81 度 19 分 16 秒

セールウィラ・マンガラ・ラージャ・マハー・ウィハーラは、トリンコマリーからコーディヤル湾をはさんで南側、海岸沿いにある有名なランカー・パトナから6kmほど内陸に入ったところにある仏教寺院である。寺院伽藍の北側に新たに博物館が建設され、2009年6月に開館した。本博物館の建設以前、文化財は寺院内に保管されていた。

展示室は1つで、近隣の遺跡より出土した石造仏、キャンディ時代の金銅仏、碑文、土器、土製品、鉄製品、貨幣、紙幣等が並び、時代もアヌラーダプラ時代の仏教遺物から近現代のものに及んでいる。周辺遺跡を紹介する写真パネルも掲出されている（写真39）。建物外の回廊には、仏足石、古代寺院のトイレ、建築部材等の石製品が展示され

写真 37.　館内の様子

写真 38.　館内展示作品

写真 39.　遺跡に関するパネル展示

写真 40.　回廊での展示

ている。収蔵品のうち彫刻の多くは考古局の所管であり、一部は寺院が所蔵している。職員は考古局に所属し、2名が常駐し、3名が遺跡管理にあたっている。

博物館の建設にあたり、セイロン銀行が資金援助した。

5. 北部、東北部の文化遺産

2013年の調査で得た情報をもとに、2014年2月、5月の調査では考古局本部の各地域担当職員や現地の職員の案内で、仏教、ヒンドゥー教、イスラム教といった各宗教の遺構およびポルトガル、オランダならびに英国による植民地時代の歴史的建造物等を視察した。調査では歴史や保全の状況について考古局職員に聞き取りを行ない、調査最終日の報告会では各地での文化遺産保護の課題について考古局職員と意見交換した。本章では29件の遺跡や歴史的建造物について報告する。

5–1. ジャフナ

スリランカ北部のジャフナ地域には、現在も多くのタミル人が居住する。タミル人のなかには少数ではあるが、仏教徒やキリスト教徒、またイスラム教徒も存在するが、多くはヒンドゥー教徒で、ジャフナ市街地・農村部ともに、ゴープラムを伴った大規模なヒンドゥー教寺院もあれば、街角の小さな祠まで大小さまざまである。一方、遺跡は別として、仏教寺院の主要なものは市内中心部に、シュリー・ナーガ・ウィハーラ（Sri Naga Vihara）があるに過ぎない。キリスト教会はヒンドゥー教寺院の祠や寺院の数ほど多くはないが、仏教寺院に比せば、かなりの数が存在する。また、イスラム教徒も居住することからモスクもいくつか存在する。共通するのは、宗教建造物は概ね内戦後に建造されたものがほとんどであるという点である。

これらの宗教建造物に対して、植民地時代の建物も市街地には残る。2013年3月の調査では内戦で破壊された建造物がまだ市内に見られたが、2014年2月の調査では文化遺産として登録された建造物を除けば、ほとんど撤去されていた。保存された植民地時代の建造物として特筆すべきは、オランダ統治時代に建設されたジャフナ・フォートと、観光文化振興の拠点とするべく再開発が予定されている旧庁舎である。いずれも考古局の管轄下にあるが、前者はオランダ政府の資金援助を受け、修復作業が進行中である。

本項では、視察したジャフナの文化遺産について概要を述べるが、ここでスリランカ北部のヒンドゥー教史を簡略に述べておく。スリランカ北部とインドとの関係は、おそらく紀元前に遡るが、スリランカにおけるヒンドゥー教の定着は、10世紀頃の南インドでヒンドゥー教を信奉したチョーラ朝の支配が及んだ時期に、南インドより多くのタミル人が移住したことによる。また、チョーラ朝がシヴァ教を信奉していたこともあり、ジャフナ北部のヒンドゥー教寺院の多くはシヴァ派に属する。13世紀に成立したとされるジャフナ王国には500近いヒンドゥー教寺院が存在したというが、16世紀末から顕著になるポルトガルの実質支配によってヒンドゥー教寺院はすべて破壊され、その寺領も剥奪されて、王をはじめ民衆までもキリスト教への改宗を迫られた。その後、1658年ポルトガルに代わって覇権を握ったオランダは宗教に対して寛容で、ヒンドゥー教寺院の復興を認める政策を打ち出し、再び、ジャフナには多くの寺院が建立された。しかしながら、1983年以降、LTTEの活動が活発になり内戦が激化すると、オランダや英国の植民地支配を生き抜いたヒンドゥー教寺院も戦渦に巻き込まれ、荒廃した。2009年5月の内戦終結後、再び寺院の再建や修復が進み現在に至っている。

【参考】

Brito, C., *The Yalpana-Vaipava-Malai,* New Delhi, 1879 (rep.2007).
Pathmanathan, S., *Hindu Temples of Sri Lanka,* Kumaran Book House, Colombo, 2006.

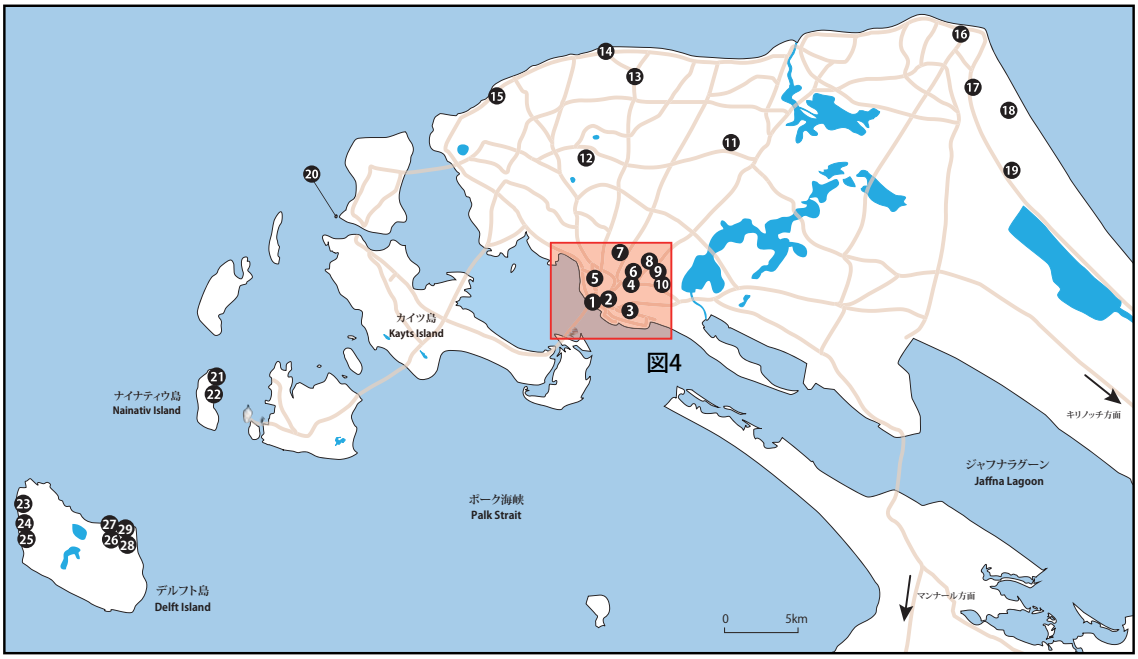


図 3.　ジャフナ広域図

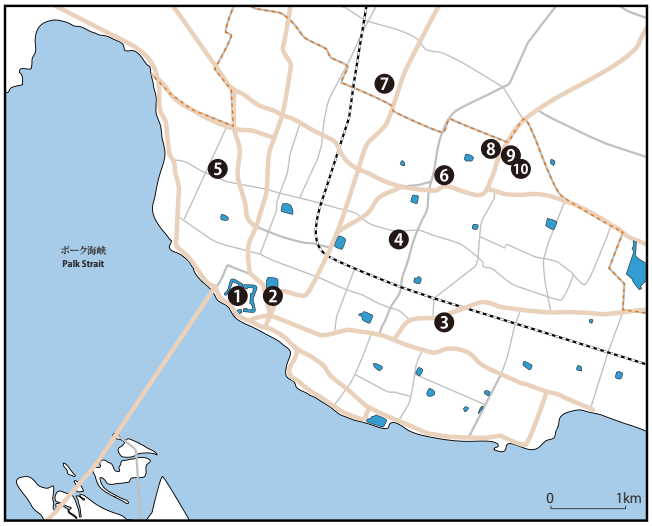


図 4.　ジャフナ市街地拡大図

1. ジャフナ・フォート
2. ジャフナ図書館
3. 旧ジャフナ庁舎
4. ジャフナ考古博物館
5. マズラウッディーン・スクール
6. ナルール・カンダスワーミ・コーウィル
7. ジャフナ大学
8. マンディリ・マナイ
9. サンギリ・トープおよび王宮址
10. ヤムナリ貯水池
11. ニラワライ
12. カンタロダイ仏教寺院遺跡
13. マーウィッダプラム・カンダスワーミ・コーウィル
14. ナグレーシュワラム寺院
15. ダンパコラ・パトナ
16. テル・モディ・マダム
17. ウァッリプラム
18. 聖アントニウス教会
19. ワダマラチーッチ
20. ハメンヒール・フォート
21. ナーガ・プーシャニ・アンマン寺院
22. ナーガディーパ・ウィハーラ
23. 仏教遺跡
24. ヒンドゥー教寺院遺跡
25. 野生の馬
26. 旧オランダ病院
27. 鳩小屋
28. バオバブの木
29. ダッチ・フォート址

ジャフナ本土の文化遺産（ジャフナ市街地）

サンギリ・トープおよび王宮址
Sangili Topu and Foundation base belonging to Sangili(Changiliyan) Palace

地図：P.35 図 4 ❾

ジャフナ市街地　北緯 9 度 40 分 34 秒、東経 80 度 2 分 10 秒

サンギリ・トープは、サンギリ王の王宮への入口と見られている。現在は半円形アーチの開口部をもった建物の一部が残存する。ジャフナ半島北部のポイント・ペドロへ向かう、ポイント・ペドロ・ロードの南端ムッティライ・ジャンクションのほど近くに位置する。

サンギリとは、ジャフナ王国のサンギリ・セーガラージャセガラン王（1519～1564）のことである。ポルトガルのスリランカ北部統治に最後まで抵抗したジャフナの英雄で、キリスト教に改宗した人々や聖職者を大虐殺したことでも知られる。この建築は煉瓦造りの漆喰仕上げで、入口アーチや緩やかなカーブを用いた上部装飾はポルトガルの建築様式によるという。しかし、入口部分しか現存せず、全容は不明である。現在は剥落した漆喰部分をコンクリートで補修し、降雨による損傷を防ぐため、建物上部に簡易の屋根が設けられている。

この建物の裏手に伸びる脇道を進むと、王宮址の基壇部とされる区画と貯水池があるが、いずれも歴史を裏付ける十分な情報はない。

写真 41.　王宮の玄関

写真 42.　現存する基壇部

マンディリ・マナイ
Mandri Manai

地図：P.35 図 4 ❽

ジャフナ市街地　北緯 9 度 40 分 34 秒、東経 80 度 2 分 10 秒

マンディリ・マナイは、大臣の邸宅という意味である。ポイント・ペドロ・ロードに面し、先述のサンギリ王王宮址から100mほど北上したところに位置する。建物は15世紀に遡るというが、正面部分はオランダ統治時代の建設と見られている。王宮の一部であったという説や、ジャフナのパララージャセーカラン王（King Pararajasekaran）の王子パラニール・パシンハン（Prince Paranir Pasinghan）の邸宅であったとする説等さまざまである。

建物の正面入口は円柱や変形アーチを組み合わせたもので、外壁面にタミル語と英語による1890年の年記と人物名がみえる。最上部にはアーチや付柱を備えた尖塔を頂く。正面入口を入ると、木造の列柱や尖塔アーチのほか、植物モティーフを意匠化した独特の持ち送り装飾が見られ、後方の内部空間に対して華やかな印象を与えている。建物は石造の漆喰仕上げで、桁や梁といった構造部分、列柱やアーチの一部に木材が使用される。2階建てで、現在も階段が残り、内部もアーチのデザインが多用される。建物後方には円形や方形の窓が設けられ、意匠的にも興味深い。建物東側には井戸も残っている。

敷地には、現在考古局の管轄であることを示す看板が立てられ、建物を含む一帯が職員によって管理されている。

写真 43.　マンディリ・マナイ外観

写真 44.　マンディリ・マナイ内部

旧ジャフナ庁舎
Jaffna Old Kachcheri Building Archaeological site

地図：P.35 図 4 ❸

ジャフナ市街地　北緯 9 度 39 分 35 秒、東経 80 度 1 分 46 秒

オランダ統治時代の創建であるが、現在の建物は英国統治時代、19世紀前半に建設された。現在は屋根も扉もなく、壁には無数の銃撃の跡が残る。内部の部屋のひとつには、床にタイルが貼られ、往時を偲ばせている。かつて内戦中はLTTEの警察が使用し、周辺には多くの地雷が埋められていたという。内戦終結後、旧庁舎前の道を挟んで反対側に新庁舎が建設され、旧庁舎はジャフナの植民地時代の建造物のひとつとして考古局の管理下にある。現在は、博物館や劇場、観光案内をも含んだ総合文化施設として再開発するべく現状調査等が進行中である（詳細は3-2.を参照）。

写真 45.　建物 1 階内部

写真 46.　建物壁面

ジャフナ・フォート
Jaffna Fort

地図：P.35 図 4 ❶

ジャフナ市街地　北緯 9 度 39 分 47 秒、東経 80 度 0 分 30 秒

ジャフナ・フォートは、ポルトガル統治時代には方形のフォートであった。植民地支配を広げるオランダは、ポルトガルを1658年、3カ月半にわたって包囲攻撃した。その後、オランダはポルトガルのフォートを撤去し、その場所にまず中核となる星形の五陵堡を建設し、1792年に外壁の要塞部分の門が完成した。南側の門上部には1680年の年記が今も残る。1795年9月にはオランダに代わって南アジアに勢力を延ばす英国に覇権を奪取されたが、フォートは無傷で明け渡された。かつてはスリランカのなかでも最も保存状態の良好なフォートであったが、LTTEとの内戦によって内部の教会やクイーンズ・ハウスとともに著しく損傷を被った。

ジャフナ・フォートの保存修復事業は、LTTEの脅威が去った2009年、第1期として同年11月から2012年12月ま

で、オランダ政府の資金援助のもとスリランカ政府によって行なわれた。経費は約1億460万ルピーで、6210万ルピーをオランダ政府が、4250万ルピーをスリランカ政府が支出した。現地で働く石工や監督者はスリランカ人で、ジャフナ大学人文学部歴史学科の学生や卒業生も作業に加わっている。考古局北部支部の職員のほか、非正規労働者としては75名が働く。

フォート内部では城塞、南側の小部屋を使用し、インフォメーションセンターとしてジャフナ周辺の文化遺産を写真と文で紹介するパネル展示を行なっている。これ以外にも今後も、観光推進のための施設の充実を図っていく予定とのことである。

フォート外壁は2013年12月に工事を終え、外壁上部を巡ることができるようになっている。2014年調査時、フォート内の教会は保存修復を俟っているところであったが、これら含め、内部の修復は2014年内終了を目指している。現在、ジャフナ地域で進行する保存修復事業のうち、遺構の規模、予算ともに最も大きなものが、このジャフナ・フォートである。フォートは経済省の管轄下にある。

写真 47.　フォート外観

写真 48.　未修復のフォート内構造物

写真 49.　破壊された教会跡

写真 50.　修復済みのフォート外壁上部

写真 51.　クイーンズ・ハウス

写真 52.　フォート内のインフォメーションセンター

ナルール・カンダスワーミ・コーウィル
Nallur Kandaswamy Kovil

地図：P.35 図 4 ❻

ジャフナ市街地　北緯 9 度 40 分 29 秒、東経 80 度 1 分 47 秒

ナルール・カンダスワーミ・コーウィルは、ジャフナの史書『ヤルパナ・ワイパワ・マライ』によれば、948年創建とある。同寺院では、1450～1467年にコーッテ王国ブバネーカバーフ6世（*Cv.* 92.1）が建造したと伝えるが、南インドの文献史料によれば、それよりも早い10世紀中頃にチョーラ朝の王妃センビアン・マハーデーヴィーがブロンズ像等を同寺に奉納したことが知られる。大航海時代に入ると、ポルトガルとジャフナ王国との間の激しい戦闘にさらされ、ジャフナ王国は大敗を喫するとともに、1620年、寺院はフィリペ・デ・オリヴィエラ大尉によって取り壊され、キリスト教会が建設されたという。現在の寺院は、18世紀のヒンドゥー教復興期に再建され、その後も増広してきたものである。寺院は現在も10世紀にインドからもたらされたブロンズ諸像を所蔵しているとされる。

同寺院は、南インド、タミル・ナードゥ州に起源をもつムルガン神を祀る。ムルガンはタミルの人々の間で最も篤い信仰を受けている神で、図像的にはシヴァ神の次男カールティケーヤと同様に、孔雀に乗り、手に槍を持つ姿で表される。

現在は黄土色に塗られたゴープラムが聳え立つ。1日に数回の神々の開帳には信者が詰めかけ、神への祈りを熱心に捧げる。

【参考】

Brito, C., *The Yalpana-Vaipava-Malai,* New Delhi, 1879 (rep.2007), p. 17

写真 53.　ナルール・カンダスワーミ・コーウィル

写真 54.　ゴープラム

ジャフナ図書館
Jaffna Library

地図：P.35 図 4 ❷

ジャフナ市街地　北緯 9 度 39 分 43 秒、東経 80 度 0 分 44 秒

建物の礎石には1955年3月29日との年記があるが、実際の建設は1958年にスタートし、1960年に完成をみた。建物はインドのムガル様式を用いた建築で、対称形や頂部のドームが目をひく。内戦が本格化する以前の1981年6月1日夕方、バスで乗り付けた暴徒が放った火によって97,000冊とも言われている全ての書物が灰塵と化してしまった。停戦後、建物は修復され、2003年2月の再開時に内外から30,000冊の寄贈を受けた。

写真 55.　図書館外観

マズラウッディーン・スクール
Mazrauddeen School

地図：P.35 図 4 ❺
ジャフナ市街地　北緯 9 度 40 分 41 秒、東経 80 度 0 分 21 秒

ジャフナにイスラム教徒のコミュニティが形成されたのは、南インド西海岸にアラブからの商人たちが貿易のために渡来した8世紀頃とみられている。スリランカの人口の大半が仏教徒を占めるなかで、ヒンドゥー教徒以上にマイノリティ集団となっているのがイスラム教徒である。内戦以前は、4,000人のイスラム教徒が居住していたが、内戦が激化し、彼らは一斉にこの地を追放され、国内避難民となった。内戦後、この地に帰還したのはそのうちの1割という。

この建物は1908年の創建で、かつてマドラサ（学校）として使用されていた。内戦中の爆撃や銃撃の傷痕が残る。現在、この廃墟の後ろでは新たに建物が建てられ、ジャフナに帰還したイスラム教徒の子どもたちを対象に小学校が運営されている。また廃墟の脇には、内戦後に建てられた新しいモスクが立っている。

写真 56.　マズラウッディーン・スクール

写真 57.　建物内部

ジャフナ本土の文化遺産（ポイント・ペドロ・ロード周辺）

ポイント・ペドロ周辺は漁村として栄えている。漁業を営む各家々が海岸に面した道路脇に収穫した魚を干したり、地引き用の網を干す風景が見えるが、同地域には植民地時代の遺構のほか、ヒンドゥー教寺院も残り、現在も多くの信者が日々礼拝に訪れる。

ニラワライ
Nilavarai

地図：P.35 図 3 ⓫
ポイント・ペドロ・ロード周辺　北緯 9 度 45 分 26 秒、東経 80 度 5 分 31 秒

写真 58.　現存する泉

写真 59.　ストゥーパの基壇址

ニラワライには、乾期でも水をたたえた深さ50mの巨大な泉がある。下方の水は塩分を含み、水底の岩盤が海に繋がっているという。この地は、インド叙事詩のひとつ『ラーマーヤナ』によれば、ラーマが魔王ラーヴァナによってランカー島（スリランカ）に連れ去られたシーターを奪還するべくランカー島に渡った際、喉の渇きを癒そうと休憩した場所とされる。ラーマは持っていた矢を地面に突き立てたところ、そこから止めどなく水が噴き出し、今に至るという伝説を持つ。

泉の脇に、コーラル・ストーンと煉瓦によるストゥーパの基壇址が残る。同遺構からは、仏陀像が出土している（ジャフナ考古博物館蔵, inv. no. 54-630-23）。同像は総高106cmで、低めの肉髻、二重刻線の衣文といった特徴があり、アヌラーダプラ時代と見られる。

【参考】
von Schroeder, U., *Buddhist Sculptures of Sri Lanka*, Visual Dharma Publications ltd., Hong Kong, 1990, p. 685.

テル・モディ・マダム
Theru Modi Madam

地図：P.35 図 3 ⑯
ポイント・ペドロ・ロード周辺　北緯 9 度 49 分 24 秒、東経 80 度 14 分 16 秒

テル・モディ・マダムは、スリランカ北端のポイント・ペドロから800mほど南に位置する建物である。キャンディ周辺に見られる巡礼者等の休憩所や宿泊所として知られる「アンバラマ（Ambalama）」と呼ばれる建物に類するもので、ジャフナ北部に出入りする旅人の宿泊所として使用された。建物は、道路を挟んで左右に基壇を設け、基壇上には不揃いの石柱がそれぞれ6本並び、その上に梁を渡している。現在は、その梁の上部に腰壁を設けてさらに高さを確保し、左右の構造体と道路を覆うように、上部に屋根が取り付けられている。太陽が照りつける時間には、現地の人々がこの建物の下に集い、会話を楽しんでいる。

写真 60.　テル・モディ・マダム

ウァッリプラム
Vallipuram

地図：P.35 図 3 ⑰
ポイント・ペドロ・ロード周辺　北緯 9 度 47 分 22 秒、東経 80 度 14 分 34 秒

ウァッリプラム寺院は、シヴァ派が多数を占めるジャフナでは少数派のヴィシュヌ派のヒンドゥー教寺院で、創建は13世紀頃とされ、ナルールのカンダスワーミ寺院と同様に古い歴史を有する。聖室の中央に祀られるのはヴィシュヌ神ではなく、ヴィシュヌ神の持物のひとつである輪宝（*sakkaram*）である。寺院の伝えるところによれば、子どもに恵まれなかった女性がヴィシュヌ神に自らの行ないに対して許しを請おうと、海に向かって日々腕を延ばして誠心誠意の祈りを捧げた。ある日、村の漁師が網に1匹の大きな魚を見つけた。網を抜けて、女性の腕のなかに入るや、ヴィシュヌ神に似た子どもに変わり、

写真 61.　ウァッリプラム寺院外観

再び姿を消した。人々は、ヴィシュヌの輪宝を得て、この地に祀ったという。

また、ここから、紀元後1世紀の金板銘文が発見されている。銘文は、この地をヴァサバ王が支配していたこと、またその大臣が寺院を建立したことを記している。

同寺院が立つ地域にはかつて仏教寺院が存在していたことが知られ、アヌラーダプラ時代の仏陀像も出土している。同像は、1906年当時の英国人行政長官ヘンリー・ブレイク卿（Sir Henry Blake）によって、タイのラーマ5世（Rama V）に贈られた。現在、仏陀像は、ラーマ5世が建立したバンコクのベンチャマボピット寺院に祀られている。

【参考】
von Schroeder, U., *Buddhist Sculptures of Sri Lanka,* Visual Dharma Publication ltd., Hong Kong, 1990, p. 148, pl. 31.

聖アントニウス教会
St. Antonius Church

地図：P.35 図 3 ⑱
ポイント・ペドロ・ロード周辺　北緯 9 度 46 分 12 秒、東経 80 度 16 分 22 秒

ポイント・ペドロからウァッリプラムのヒンドゥー教寺院への道をさらに南下すると、海沿いに砂漠の景色が広がる。これはマナルカドゥ砂丘と呼ばれる一帯で、この砂丘のなかに埋もれそうに残るのが、聖アントニウス教会である。建物は100年ほど前に建てられたものであるが、海風による被害も相まって風化が甚だしい。

建材には石や煉瓦が用いられ、コーラル・ストーンの粉を用いた漆喰で付柱や柱頭の装飾を仕上げている。付柱の柱身には縦に溝彫りが施され、柱頭はイオニア式で左右が渦巻き文様を呈し、中央に意匠化された葉文が表されている。建物は身廊部分に大小のアーチを多用し、奥壁にはキリストや聖人を祀ったであろう大小の龕が今も残っている。

この教会の北側には新旧の多くの十字架墓が砂に埋もれて立っている。

写真 62.　聖アントニウス教会身廊部分

写真 63.　教会奥壁

ジャフナ本土の文化遺産（ジャフナ北部）

カンタロダイ仏教寺院遺跡
Kantharodai Buddhist Site

地図：P.35 図 3 ⑫
ジャフナ北部　北緯 9 度 44 分 48 秒、東経 80 度 0 分 24 秒

カンタロダイは、ジャフナを代表する大規模な仏教寺院遺跡である。『マハーヴァンサ』に記された紀元前3世紀に遡る「カドゥルゴダ寺院」とする説もある。1916年P・ペイリス（P. Peiris）によって発見され、1917～1919年にかけて発掘された。発掘では、大小56基のストゥーパが発見されており（最大で直径約7m、小規模なもので2m弱）、非常に密集して建造されている。ストゥーパに加え、石柱や欄楯、ガードストーン、仏足跡、そして仏陀像や菩

薩像、紀元前に遡る硬貨等が出土しており、状態のよいものはすべて市内のジャフナ考古博物館に収蔵・展示されている。建築部材には、コーラル・ストーンが使用され、内陸部との建築材料の違いがみられる。

1948年、スリランカ考古局は同遺跡の保護を目的に、周辺地域を購入したが、その後、近隣のタミル人住民に所有が移り、現在はストゥーパ20基あまりが残る区画のみが考古局の管轄するところとなっている。

現在、遺跡の傍らには、仏陀を祀った小祠堂があり、遺跡内は非常に美しく整備されており、シンハラ語による遺跡概要を記した看板も見られる。調査時には国内や海外からの観光客も散見された。

【参考】
Peiris, P. E., “Nagadipa and Buddhist remains of Jaffna”, *The Journal of the Royal Asiatic Society (Ceylon Branch)* vol. 26, No. 70, 1918, p. 11.

写真 64.　ストゥーパ群

写真 65.　修復年記 (1970 年) のあるストゥーパ

写真 66.　遺跡入口にある解説（シンハラ語）

写真 67.　カンタロダイ出土の仏陀像（ジャフナ考古博物館蔵）

マーウィッダプラム・カンダスワーミ・コーウィル
Maviddapuram Kanthaswamy Kovil

地図：P.35 図 3 ⓭
ジャフナ北部　北緯 9 度 48 分 4 秒、東経 80 度 2 分 9 秒

マーウィッダプラムは、後述するナグレーシュワラム寺院へ向かう道の入口に立つヒンドゥー教寺院で、ジャフナの史書『ヤルパナ・ワイパワ・マライ』に以下のような伝承が残っている。チョーラ朝の王の子女マルタップ・ピラ・ヴィカ・ヴァッリは、顔が馬のような形相で激しい腹痛で痩せ衰えていたが、キーリマライという泉を訪れ、ナクラの指示どおりに沐浴した。その後も毎日祈りを捧げ、沐浴したところ、美しい顔となり、痛みも取れたという。この奇蹟を記念してこの地はマーウィッダプラムと呼ばれるようになる。彼女は父である王に頼み、寺院建立のための人員や資材をマーウィッダプラムに送らせ、スカンダ・クマーラ神を祀る寺院を建造したという。また、祀ら

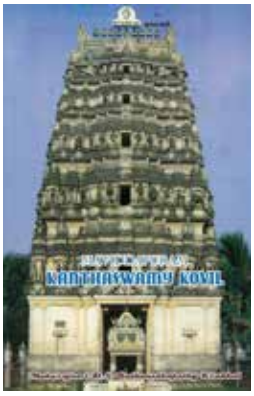


写真 68.　寺院の小冊子
（英語、タミル語）

れた神像も、王がバラモンとともにヒンドゥー神像や女神像、さらに寺院で用いる儀礼用の用具を送ったと伝えている。

同寺院は、他のヒンドゥー教寺院と同様に17世紀、ポルトガル勢力によって破壊され、一部の建材は、カイツ島に当時建設中のフォートの部材として使用された一方で、寺院側は破壊や略奪を免れるため、神像や儀礼の用具が土に埋められ隠されたという。寺院は、ヒンドゥー教復興に伴い1782年に再建されるが、現在のマンダパを有する部分は1927年に建造されたもので、列柱には馬顔の子女の彫像も刻まれている。

【参考】
Brito, C., *The Yalpana-Vaipava-Malai*, New Delhi, 1879 (rep. 2007), pp. 9-11.

写真 69.　儀礼用の出車

写真 70.　馬顔の子女像

ナグレーシュワラム寺院
Naguleswaram Temple

地図：P.35 図 3 ⑭

ジャフナ北部　北緯 9 度 48 分 48 秒、東経 80 度 0 分 44 秒

ナグレーシュワラム寺院に関する歴史は、ジャフナの史書『ヤルパナ・ワイパワ・マライ』に見出せる。同史書は、敬虔なシヴァ教信者であったウィジャヤ王が、国の統治を始めるにあたり、国の四方にシヴァを祀る寺院をまず建立し、そのうちの北方のキーリマライの近く、ティールタ・タンパライという地に建てられた2つの寺院のうちのひとつが、名称が変更され、現在の寺院となったことを伝える。

現在の寺院は18世紀のオランダ統治時代に再建されたものであるが、ゴープラムをはじめ、寺院内の建築整備を現在も行なっている。寺院の一角には、丸彫りの彫刻で荘厳された建造物が残る。

ナグレーシュワラム寺院から200mほど北の海岸脇にキーリマライという鉱泉があり、病に効果があるとされる。男性用、女性用に分かれて整備されており、寺院参拝や観光で訪れた人々が水浴を楽しんでいる。キーリマライの名称は、タミル語でキーリがマングースを、マライは丘を示し、先述のナグレーシュワラム寺院を創建したナクラムニ（ナグラスワミ）が、その水で沐浴したところ、それまでマングースのような顔であったのが、人間の顔に変わったという伝説に基づく。ジャフナの史書では、「ナクラマライ」とも呼ばれている。

【参考】
Brito, C., *The Yalpana-Vaipava-Malai,* New Delhi, 1879 (rep. 2007), pp. 3-4.

写真 71.　再建中の寺院

写真 72.　彫刻の施された門

写真 73.　キーリマライ

島嶼部の文化遺産について

ジャフナ王国は13世紀から17世紀（1620年）まで存続するが、16世紀前半にはポルトガルの実質的支配下に入った。その後40年ほどでオランダの手に渡り、オランダはジャフナ周辺の13の島のうち8つにオランダの地名を付けた。現在は当初の名称に戻った島もある。島嶼部で最大のデルフト島、ナーガディーパと呼ばれたナイナティウ島を調査した。いずれの島にも、カイツ島から船で渡った。

デルフト島

デルフト島はオランダ統治時代に付けられた名称で、それ以前はネドゥンティウ、パースティウと呼ばれた。観光開発の進むジャフナに対して、2013年3月調査時、デルフト島には観光客の姿は見られなかった。島内には、海軍を含め、5,000人ほどの人々が暮らす。島には10のキリスト教会と8つのヒンドゥー教寺院があるが、カトリックが大半を占めるという。

船着場には、デルフト島の見所を名称と写真で紹介したパネルが立てられている。島内の文化遺産は、アヌラーダプラ時代のストゥーパのほか、17世紀のポルトガル時代から英国統治時代に関連する建造物等6件がある。デルフト島の文化遺産については、ジャフナ地域の文化遺産リストの一部として考古局による報告書が、また、2014年に刊行されたプシュパラトナム教授による *"Tourism and Monuments of Archaeological Heritage in Northern Sri Lanka"*にもデルフト島の文化遺産への言及がある。以下、2013年に視察した7件（鳩小屋[1]、ダッチ・フォート址、野

1　海軍のキャンティーン前から西に数百 m 進んだところに位置する鳩小屋の脇には、英国統治時代の裁判所と監獄の址が残る。この裁判所址に隣接して、現在島の新しい役所が建設されている。

生の馬[2]、バオバブの木、仏教遺跡、厩舎、巨人の足跡）のうち、ダッチ・フォート址と仏教遺跡について述べる。

ダッチ・フォート址
Old Dutch Fort

地図：P.35 図 3 ㉙

デルフト島　北緯 9 度 31 分 66 秒、東経 79 度 41 分 99 秒

ダッチ・フォート址は、島に唯一の病院の奥に建っている。コーラル・ストーンを使用した建築物はほとんど崩壊し、全体像を想像するのは困難であるが、壁幅からみて非常に堅固な構造であったことは容易に推測される。当初はポルトガルの城塞として建造されたとも伝えられている。窓や通路であったと思われる部分の損傷が甚だしく、バニヤン樹の幹が石を割り、石積みを崩している部分もある。遺構址には建物の基壇部が残る。フォート内には病院も併設されていたという。

写真 74.　残存する城塞

仏教遺跡
Ancient Buddhist Site

地図：P.35 図 3 ㉓

デルフト島　北緯 9 度 32 分 18 秒、東経 79 度 39 分 10 秒

デルフト島で確認されている仏教遺跡は1カ所で、島の北東部に位置し、ストゥーパ3基と建造物址からなる。最も大きいストゥーパ（直径10m弱）はやや小高い位置にあるが、島自体に標高差がほとんどないことからストゥーパを建造するために盛り土をしたと思われる。他の2基は直径約2mで、このうち一つは円形の基礎を遺すのみである。もう1基は海の方へ小道を進んだところにある古井戸の傍に残っている。2つのストゥーパの間にほぞ穴（深さ約10cm）のある石材が残る。

ストゥーパはアヌラーダプラ時代の造立とみられ、覆鉢内には小さなコーラル・ストーンが、基壇部等にはコーラル・ストーンを削った石材が使用されている。ジャフナより同行した考古博物館監理官によれば、1978年、ローランド・シルワ博士らが考古調査を初めて実施し、最近では2012年12月に考古局監督のもと修復を行なったとい

写真 75.　円形のストゥーパ基礎

写真 76.　ストゥーパ基礎部分の拡大

2　現在見られる馬（何頭かは島民の個人所有）は、ポルトガル時代に飼育されていた種で、島の南西に広がる草地に生息する。島外への移動が保護法で禁止されている。

う。また、1978年当時の発掘では仏像は出土していないが、英国統治時代には仏像が出土した記録があるという。

なお、この仏教遺跡のほか、プッカドゥ地域にヒンドゥー教寺院遺跡（北緯9度30分、東経79度40分）があるが、今回は調査していない。この遺跡は2010年に発見され、本尊を祀る聖室のすぐ後方に、オランダ時代（17世紀）に建設された道路があり、道路の下に当初この寺院を取り囲んでいた周壁の存在が確認されている。遺構周辺から10～16世紀の硬貨も出土していることから、同遺跡は17世紀以前に遡ると考えられている。

ナイナティウ島

ナーガディーパ・ウィハーラ
Nagadipa Vihara

地図：P.35 図 3 ㉒

ナイナティウ島　北緯 9 度 36 分 76 秒、東経 79 度 46 分 46 秒

ナイナティウという島名より、仏教徒にはナーガディーパとして親しまれている。史書は、仏陀がスリランカを3度訪れたと記しているが、この島は2度目に訪れた地である。『ディーパワンサ』によれば、仏陀は、摩尼宝珠で飾られた玉座を巡って争っていた海のナーガのマホーダラと陸のナーガのチューローダラを和解させるべく、インドの祇園精舎からこのナーガディーパに向かい、神通力を用いて2人を戒めた。2人は仏陀を称えて玉座を譲ったという（*Dip.,* ch. 2）。この説話は、タミル叙事詩『マニメーハライ』において、主人公マニメーハライがマニパッラワン島（ナイナティウ島）で光り輝く玉座が顕現するのを目の当たりにする際に、玉座の由縁として上記のナーガの物語が語られている（*Manimekarai,* ch. 8）。また、『マハーウァンサ』には、紀元前3世紀頃の出来事として菩提樹がインドからもたらされた際、最初にナーガディーパのジャンブコーラという港に着き、それを記念して、2つの寺院が造営されたことを記すほか（*Mhv.,* ch.19-20）、ポロンナルワ時代に南インドからスリランカに侵攻したチョーラ勢力を追放したヴィジャヤバーフ1世がナーガディーパのジャンブコーラウィハーラを修繕したことも伝えている。

内戦終結後は南部からも多くの巡礼者がこの聖地を目指して訪れており、ナーガディーパへ渡る船は常に老若男女で込み合っている。船着き場からの桟橋（2013年完成）をまっすぐに進むと、大きな白い門が視界に入る。それをくぐれば寺院は目の前にある。内戦中寺院は荒廃したというが、内戦終結後の内外の寄進によって復興が進み、龍蓋の下に坐す仏陀像をはじめ、ストゥーパや仏陀像を祀った祠堂が2棟建設され、現在も整備が進行中である。堂内には、ミャンマーやタイから寄贈された仏陀像が祀られている。

写真 77.　桟橋から望む寺院入り口

写真 78.　再建されたストゥーパ

ナーガ・プーシャニ・アンマン寺院
Naga Pooshani Amman Temple

地図：P.35 図 3 ㉑

ナイナティウ島　北緯 9 度 37 分 14 秒、東経 79 度 46 分 50 秒

ナーガ・プーシャニ・アンマン寺院はナイナティウ島の北に位置し、ナーガ・プーシャニ・アンマンという女神を本尊として祀る。ナイナティウを守護するだけでなく、子授けの女神としてタミルの人々から篤い信仰を集めている。同寺院はインドラ神による建立という伝承をもつヒンドゥー教寺院で、インド叙事詩『マハーバーラタ』に登場する。同叙事詩によれば、インドラは聖仙ゴータマの妻に近づこうとして逆鱗に触れ、身体全体にヨーニ（女陰）を付けられる。恥辱に耐えきれなくなったインドラは、マニドゥウィーパ（ナイナティウ島）を訪れ、その島の女神ブワネーシュワリ・アンマンに一心に祈りを捧げる。女神はインドラの献身的な祈りに応えて体表のヨーニを目に変じたという。この出来事によってインドラはこの島に女神を祀る寺院を建立したという。インドラによる同寺院の建立後、あるナーガがブワネーシュワリ・アンマンに礼拝しようと海を渡っていたところ、天敵であるガルダの標的になってしまう。航海中の商人が二者を見つけ、ナーガを見逃すよう懇願すると、ガルダは商人に女神を祀る豪華な寺院を建立することを条件にナーガを見逃したというものである。

歴史的には同寺院出土のパラークラマバーフ1世（在位1153～86年）の銘文が知られる。伝承では、ある商人がアンマン（女神）の恩寵を受けて無事に航海できたことを感謝し、ナーガ祠堂に寺院を建てたことに始まるという。16世紀のポルトガル侵略の際に寺院の建物は壊滅するが、本尊の女神像は樹木のなかに隠されて難を逃れ、1788年、ラーマリンガル・ラマチャンディラルが寺院を再建したという。

建物は、ジャフナのヒンドゥー教寺院と同様に南インドのヒンドゥー教寺院の形式に則る。ゴープラムは四方に存在するが、なかでも、海に面する東側のゴープラム（1935年建立）は30mを越える巨大なもので、対岸の船着場クリカッドゥワンからも確認できる。ゴープラムは20世紀前半に建立されたものだが、現在はゴープラムに施された無数のヒンドゥー彫刻が新たに塗装され、華やかな印象を与えている。本尊を祀るマンダパ以外にも寺院境内にはいくつかの拝殿が立っている。

ナイナティウ島から離れたカイツ島の西北に隣接するカライナガル島との間に、17世紀にポルトガルによって建設されたハメンヒール・フォートがある。城塞は、かつてジャフナ地域や島嶼部の建築資材であったコーラル・ストーンを用いて建設されたが、オランダとの争いで甚だしく損傷し、巨大な雨水を貯める貯水池とともに再建された。フォートには拘置所もあり、20世紀後半まで政治犯を拘留したり、違法漁業を行なった者を収容する海軍の施設として使用されていた。現在は、海軍が経営するリゾートホテル（Fort Hammenhiel Resort、2013年創業）として活用されている。

写真 79.　寺院入口

写真 80.　寺院境内

写真 81.　ハメンヒール・フォート

5–2. トリンコマリー

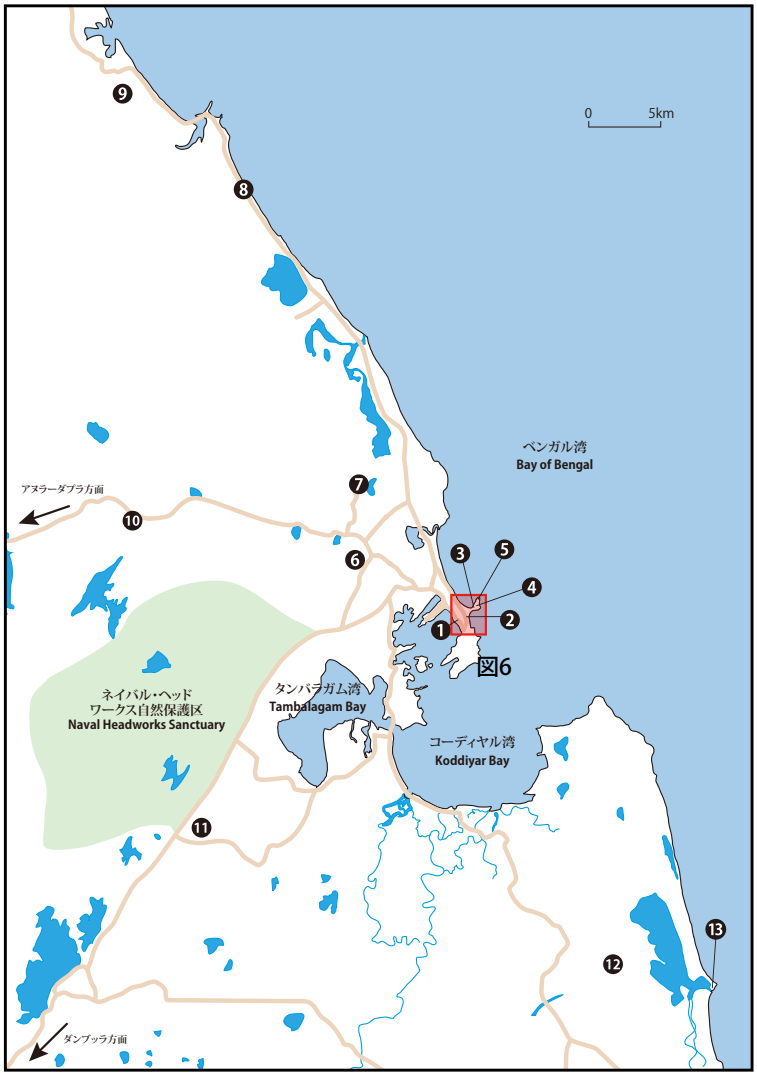


図 5.　トリンコマリー広域図

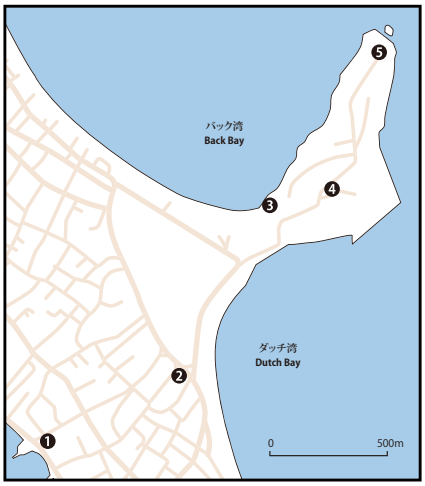


図 6.　トリンコマリー中心部拡大図

1. トリンコマリー考古博物館
2. トリンコマリー海軍海事史博物館
3. ゴーカンナ・ウィハーラ
4. フォート・フレデリック
5. コーネシュワラム・コーウィル
6. カンニャ
7. ウェルガム・ウェヘーラ
8. クッチャウェリ
9. ギリカンダカ・ウィハーラ
10. リディカンダ
11. シュリー・アクボプラ・ラージャ・マハー・ウィハーラ
12. セールウィラ考古博物館/セールウィラ・マンガラ・ラージャ・マハー・ウィハーラ
13. ランカー・パトナ

コーネシュワラム・コーウィル
Koneswaram Kovil

地図：P.49 図 6 ❺

トリンコマリー中心部　北緯 8 度 34 分 58 秒、東経 81 度 13 分 43 秒

トリンコマリーのみならず、スリランカ全土においても重要なヒンドゥー教寺院のひとつでシヴァ神を祀る。創建はサンガム時代（前3世紀～後4世紀）に遡るとされるが明らかでない。南インドのチョーラ朝、パーンディヤ朝といったヒンドゥー王朝がスリランカに侵入した時代には彼らによって保護された。千本柱の寺院という呼称が残り、往時の寺院の威容が偲ばれる。しかし、1622年、スリランカに侵入したポルトガルは同寺院を破壊し、その石材を利用して要塞（後のフォート・フレデリック）を築いた。インド洋に臨むスワーミ・ロックと呼ばれる岩山の突端に立つ現在の寺院は、1950年代になってから造られたもので、堂于の入り口脇に坐す黄金色の巨大なシヴァ像もごく近年の造営である。寺院の手前に岩の大きな裂け目があり、これはランカーの羅刹の王であるラーヴァナが剣で切り裂いた痕という伝説がある。

写真 82.　寺院

写真 83.　伝説の残る岩の裂け目

クッチャウェリ
Kuccaveli

地図：P.49 図 5 ❽

トリンコマリー西北　北緯 8 度 49 分 15 秒、東経 81 度 6 分 6 秒

クッチャウェリ遺跡は、トリンコマリーから海岸に沿って34km西北行した海沿いに位置する。現在の幹線道路（B424 号線）のすぐ東脇に像堂の煉瓦積遺構が残り、その北側に出土品を保管する収蔵庫が立つ。かつてはこの収蔵庫の場所にストゥーパが立っていた。また、幹線道路の西側にも寺院の伽藍が広がっていたというが現在では確認できない。砂浜の広がる海岸の海につき出した小高い岩山の頂上に、直径約6.2mの煉瓦積のストゥーパが1基あり、岩山の下には浮彫を施した巨岩が横たわる。浮彫の図様は横転しており、本来、岩山の上にあったものが現在の位置に崩落したと考えられる。一部が砂に埋もれるが、浮彫は18.5×16cmの方形区画に1基ずつストゥーパを表わしたものが縦横で4×4の16区画、それらの右下に象を正面から表した区画が1つ、さらにストゥーパの右側（現状では上側）に8行のサンスクリット碑文がある。碑文は書体から6世紀頃とみられている。S・パラナヴィタナ（S Paranavitana）は銘文は書体から5～8世紀とし、その内容がこのストゥーパを作る寄進によって将来自ら仏陀の崇

高なる境地を得て輪廻の苦悩から人々を救わんとする、というものであることから、ここに大乗的思想が見られることを指摘している。

1955年、この地に建物を建てる際、石灰岩製の仏頭が発見された。この頭部は大きな螺髪、低い肉髻という南インドの後期アマラーヴァティー様式を示している。1984年には、スリランカ考古局の調査により2つの仏頭と1つのトルソが発見された。これらは地元で産出する苦灰岩を用いたもので、やはり南インドの様式を示す。また、2011年のスリランカ考古局とフランス隊の合同発掘において、さまざまなタイプの土器に加え、中国の磁器、ローマコイン等が見つかった。このような成果をもとに、同地は宗教施設であるばかりでなく、古代の海港としての機能も持っていたと考えられている。

収蔵庫には、これらの出土品をはじめとする石灰岩、苦灰石製の仏立像、仏坐像、菩薩頭部、仏足石、テラコッタのタイル等が保管されている。いずれもアヌラーダプラ時代の制作とみてよい。4～5世紀からそれに続く大乗仏教の受容といったこの地域の寺院のあり方について、本遺跡は重要な資料を提供している。

収蔵庫の外には周辺地域から出土した碑文石柱等も保管されている。

現在、ストゥーパの残る海辺の岩山上には、軍が海岸警備のために常駐している。

【参考】

Bopearachchi, O., “Sri Lanka and Maritime Trade: Bodhisattva Avalokitesvara as the Protector of Mariners”, *Asian Encounters: Networks of Cultural Interaction,* edited by Dhar P. & Singh U., New Delhi, 2013, pp. 163-190.
Cicolani, V., “Kuchchaweli2011: Campagne de fouille 23_08_2011/13_09_2011”, *Rapport preliminaire* Sondage 1 et 1bis, 2011.
Paranavitana, S., *Epigraphia Zeylanica,* vol. III, Colombo, Archaeological Survey of Ceylon, London, 1933, pp. 158-161.

写真 84.　岩山のストゥーパ

写真 85.　落下した浮彫のある巨石

写真 86.　平地の遺構

写真 87.　収蔵庫内の様子

ギリカンダカ・ウィハーラ
Girikandaka Vihara

地図：P.49 図5 ❾

トリンコマリー西北　北緯8度52分22秒、東経81度1分56秒

トリンコマリーから海岸沿いにおよそ50km西北行するとティリヤーヤに到着する。ギリカンダカ・ウィハーラは、ティリヤーヤから内陸に4kmほど西行した山中に位置する。山の南側の麓に大きな池が2つあり、その間を通って北向きに山を登ると中腹にティリヤーヤ岩壁碑文がある。パッラヴァ・グランタ文字を用いたサンスクリット語で、時代は7〜8世紀頃とされる。銘文は、ギリカンダカ寺院が「タパッス」と「バッルカ」という航海時代の商人らによって建てられたことを記している。18世紀の文献である『ナンポタ』は、この寺院をニートゥパトゥパーナ（Nitupatpana、「商人の集まるところ」の意）と呼び、『マハーヴァンサ』や『チューラヴァンサ』ではそれぞれ「ギリカンダ」（*Mhv.* 10.28; 82）、「ギリカンダカ・ウィハーラ」（*Cv.* 60.60）と記しており、銘文の示す寺名と一致する。また、仏陀成道後のエピソードとして隊商主のタプッサとバッリカによるいわゆる2商人の布施の説話はよく知られているもので、この説話と本寺院とが結び付けられている点は極めて興味深い。また、『ヴィスッディマッカ』、『サマンタパーサーディカー』や、13世紀に成立した仏教経典の『プージャーヴァリア』には次のように記される。

> 釈迦の成道後、49日を経て50日目となった日、その前をタプッサとバッリカという2人の商人が通りかかった。2人は釈迦に蜂蜜入りの食事を布施した。釈迦は彼らに対して自らの髪を与えた。それを受け取り、彼らは再び航海に出た。スリランカに至り、薪や水を探してギリカンダという場所に辿り着いた。仏髪を入れた容器を丘の頂上において、食後再びその場に戻ってくると、その容器はその場から動くことはなかった。そこで彼らはそこが聖地に違いないと考えて、容器の周りに石を積み、花を捧げて再び旅に出た。

『プージャーヴァリア』では、後にこの場所にギリカンダという僧院ができたことが記される。

この銘文の他にも、紀元前2世紀頃のブラーフミー文字の銘を残す古い石窟が残る。

山頂手前東側には煉瓦積みの円形基壇をもつ小ストゥーパがある。山頂には、寺院の中心ともいうべきワタダーゲーと、その周囲にいくつかの像堂がある。ワタダーゲーは、ストゥーパの周りに柱を立て、屋根を架構してストゥーパを覆う形式の円形建造物で、本遺跡ではストゥーパの周囲に同心円状に2重の列柱を配している。スリランカ考古局の発掘成果によれば、当初のストゥーパは直径約7.6m、8世紀頃にワタダーゲーの形式をとるようになり、径10m近くまで増広されたという。ワタダーゲーの周りに仏陀を祀る像堂や、観音菩薩を祀ったとされる像堂等複数の建造物の遺構が残る。このうち、ワタダーゲーの南西にある像堂は、現在も仏陀立像が堂内に横倒しの状態で置かれている。南には、ストゥーパに向き合うように涅槃仏を安置した堂がある。仏像は内部の煉瓦が露出しており、輪郭がかろうじてたどれるほどである。

山頂の区域は東と北に門が設けられている。東門近くには、石造碑文資料が数点置かれている。碑銘には観音信仰を示す記述のあるものや、アヌラーダプラ時代のアグラボーディ6世（733〜772）の名が見え、こうした王名からも寺院の造営時代が8世紀頃と考えられている。

北門を出て階段を下ると、僧院地区が広がる。東に僧院、西に周囲を掘り凹めた禅定堂（*padhanaghara*）を配する。本来は堂の周りを水が流れていた。アヌラーダプラ時代には、この寺院のように禅定堂は寺の西側にあり、周囲を水で囲まれていることが多い。1983年のスリランカ考古局による発掘で、禅定堂跡から多数のブロンズ彫刻が出土した。後期アヌラーダプラ時代の仏陀像や、観音菩薩像、弥勒菩薩像、尊名比定が難しい菩薩像等の他、インド・パーラ朝時代の聖観音菩薩遊戯坐像や、インドのオリッサ地方に見られる宝冠に五仏を表わす金剛法菩薩像と同形の像等、インドからの将来像も含まれる（コロンボ国立博物館所蔵）。大乗仏教のみならず密教像にまで及ぶ出土品は、スリランカ東部の他の遺跡と一線を画している。

ベンガル湾を臨む良港を持つトリンコマリー地区は、古来諸外国との交流が盛んであったが、これらの出土品はインドとの密接な交流を裏付けるもので、この寺院の重要性を物語る。

現在、麓にアマラプラ派の寺院（1957年創建）がある。内戦時には僧侶が避難し、また建造物の破壊等の被害を受けたが、内戦終結後に寺院は再興され、遺跡の整備も進められている。また、同地域に居住するタミル人ヒンドゥー教徒は、この遺跡のある山をスカンダの丘と呼んでいるという。

写真 88.　寺院入口

写真 89.　ティリヤーヤ岩壁碑文

写真 90.　山頂東側のストゥーパ

写真 91.　山頂のワタダーゲー

写真 92.　涅槃仏を安置した堂

写真 93.　横倒し状態の仏陀立像

写真 94.　山頂北側の遺構（右奥が禅定堂）

写真 95.　山頂北側の遺構

【参考】
Bopearachchi, O., “Sri Lanka and Maritime Trade: Bodhisattva Avalokitesvara as the Protector of Mariners”, *Asian Encounters: Networks of Cultural Interaction*, edited by Dhar P. & Singh U., New Delhi, 2013, pp. 163-190.
Paranavitana, S., *Epigraphia Zeylanica,* vol. IV. Colombo, Archaeological Survey of Ceylon, London, 1943, pp. 151-160.

リディカンダ
Rideekanda

地図：P.49 図 5 ⑩

トリンコマリー西　北緯 8 度 40 分 10 秒、東経 80 度 56 分 15 秒

マハー・ディウル・ウェワ（Maha Divul Wewa）から直線距離でほぼ真北に5kmほどの小山の西麓にある仏教寺院遺跡。寺の入口手前右手に掘立小屋が立ち、その中に仏像や土器等数点が保管されている。遺物はこの近郊から出土したもの。かつてはここに考古局の事務所があったが、現在はトリンコマリーへ移転している。

西面する山麓に2段のテラスが設けられ、下段にストゥーパ、上段にストゥーパと堂がある。テラス周囲の土留め壁、ストゥーパや堂には煉瓦が用いられる。

下段のテラスにあるストゥーパは、南北に縦長のテラスの北寄りに立つ。方形の大型のプラットフォームの上に円形のストゥーパが作られる。プラットフォーム上面に石造の仏足石がストゥーパを囲むように4面に置かれている。基壇の東側に階段が付設する。上段のテラスは、南側にストゥーパ、北側に像堂がある。ストゥーパは円形基壇で、ストゥーパ北側に坐仏を安置したと思われる台がある。像堂は東に主入口があり、入口下にはムーンストーンがおかれる。南にも小さな出入口がある。堂内は石柱が復元的に立っている。上段テラスから120mほど東の山の上に、煉瓦積みの円形ストゥーパがある。また、テラスから150mほど北東の山の中腹に、崩れた巨岩の下の隙間を利用した堂がある。巨岩の天井面にブラーフミー文字の銘文がある。

写真 96.　収蔵庫外観

写真 97.　収蔵庫内の様子

写真 98.　下段テラスのストゥーパ

写真 99.　山の中腹にある巨岩に刻まれた銘文

ウェルガム・ウェヘーラ
Velgam Vehera

地図：P.49 図 5 ❼

トリンコマリー近郊　北緯 8 度 38 分 43 秒、東経 81 度 10 分 16 秒

トリンコマリーの中心部から、直線距離で西北に6kmほどに位置する仏教寺院。古代の仏教遺跡と現代の寺院からなる。伽藍の周壁や建物は煉瓦と石を組み合わせて造られる。遺跡には現在は北側からアクセスするが、遺跡南側、東側にも伽藍への入口があり、本来は東か南が正面であったと思われる。伽藍は約110m四方の方形で、南北軸はやや西にふれている。

南入口を入る手前の東側に布施用の石の水槽がおかれる。入口を入ってすぐ西側、煉瓦で1段高くなった区画に東面する像堂がある。

伽藍東側には、西面するストゥーパがある。大きな方形基壇の上面は、花崗岩の切石と煉瓦で覆われる。円筒形胴部から覆鉢にかけては煉瓦積みで、北東側に増拡の痕跡を示すように内部を露出させた修理が施されている。ストゥーパの方形基壇側面には、石造浮彫で蓮華、象、天人等の意匠を表す。ストゥーパから紀元前2世紀のブラフミー文字を記した煉瓦が出土している。

伽藍の東入口は、10数段の階段と満瓶石等の装飾をほどこしており、本伽藍の入口の中では最も大きく豪華である。

伽藍中央やや北寄り、南入口からまっすぐ伸びた道の先に南面する像堂がある。堂内は、石板と煉瓦によって舗装修復されている。像堂中央に主尊を安置する煉瓦積みの小堂がある。主尊は苦灰岩製の仏立像（7～8世紀、総高278cm、像高 214cm）である。像堂内左右に小房が並び、西側の小房の1つにはヤントラガラが無造作に置かれている。堂の南側には石造碑文が並ぶ。

寺院の由来は、デーウァナンピヤティッサ王（前3世紀）がこの地に菩提樹を植えたとする伝承に始まる。遺構で確認された碑銘24件のうち、バーティカ・ティッサ王（在位140～164年）の治世に遡るものもあるが、大半を占めるのは11世紀頃のタミル文字碑銘で、その中にタミル人が僧院を寄進したことが記す銘文があり、同銘でこの寺院

写真 100.　平地の遺構（奥が像堂）

写真 101.　遺構東側に残る仏陀像

写真 102.　ストゥーパ

写真 103.　隣接する新しい寺院

を「ラージャラージャペルンパッリ」と記している。碑文には寺の改修の記録が残り、バティヤ1世、アグボ4世、ウィジャヤバーフ1世、パラークラマバーフ1世、ラージェンドラ（タミル王）等の名がみられる。

ポロンナルワ時代の12世紀に活躍したニッサンカマッラ王はスリランカ島内の巡礼を行なっているが、そのうちのひとつにウェルガム・ウェヘーラの名前があり、当時この寺院が重要であったことがうかがわれる。

遺跡は現在、平地寺院のみが容易に確認できるが、東に隣接する山中にも古い遺構がある。主な遺構は2基のストゥーパで、うち1基から舎利容器を納めた部屋が発見されている。部屋の中に須弥山を表象するメール石が置かれ、金製の舎利容器があり、この舎利容器の中に水晶製の舎利容器、その中に金で包んだ舎利があった。この舎利室の壁面には龕が設けられ、小さな青銅製の仏陀像が安置されていた。これらの遺物は一括してトリンコマリー考古博物館に収蔵されたということだが、博物館閉館後の状況は今回の調査では確認していない。

この他、山中には紀元前に遡るという石窟もある。寺院の東側の山を越えたところにペリヤクラム（Periyakulam）という大きな貯水池があり、山中にある遺跡はペリヤクラムカンダ（Periyakulamkanda）という名で知られている。

カンニャ
Kanniya

地図：P.49 図5 ❻

トリンコマリー近郊　北緯8度40分10秒、東経80度56分15秒

トリンコマリーの西北郊に隣接するカンニャ地区には、スリランカでも珍しいカンニャ温泉がある。温泉といっても我が国のそれとは趣を異にしており、野天で老若男女が入り混じって最低限の衣服をつけたまま、7つの四角い水槽に湧き出た湯を桶ですくって浴びるというものである。現在でも地元民や観光客で賑わいを見せているが、温泉自体は古代より利用されていたと考えられており、地元ではラーヴァナ時代に遡るとの伝承もある。この温泉の傍らにアヌラーダプラ時代に遡ると考えられる仏教寺院遺構がある。温泉のすぐ北には石の基礎の上に煉瓦を積んだ方形基壇のストゥーパがある。ストゥーパ基壇各面に突出があり、平面は十字形プランを呈する。ストゥーパ

写真 104.　ストゥーパの遺構

写真 105.　像堂と保管されていた出土遺物

写真 106.　カンニャ温泉

の周囲には石製の仏足石の浅浮彫が無造作に放置される。寺域にはストゥーパが2基あるというが、今回は1基のみ確認できた。ストゥーパ西側に像堂があり、ヤントラガラ等出土遺物の一部はこの区域に置かれている。2014年現在で部分的な発掘は実施されているが、寺域全体の調査は未だ終了していない。

ランカー・パトナ
Lanka Patuna

地図：P.49 図5 ⓭

トリンコマリー南東　北緯8度21分26秒、東経81度23分23秒

写真 107.　寺院で販売されている小冊子

トリンコマリーからコーディアル湾を挟んで南南東に約60km、アラッカリー・ラグーンがベンガル湾とつながる狭い水路の北側に位置する仏教遺跡。

ラグーンと大海をつなぐ水路を臨むように小高い丘の上に方形の台を設け、その上に煉瓦積みのストゥーパが建てられている。ストゥーパは円形基壇で直径約3m。2007年に修復が行なわれ、現在はこの上にストゥーパをイメージした現代風のモニュメントが作られている。そのすぐ脇には近年制作された仏陀立像がある。

紀元後4世紀、インド・カリンガの王グハシーヴァは自らの所有していた仏陀の歯舎利を守るため、娘のヘーママーラー（ランマリー）、甥のダンタに命じて、友人のスリランカ王シリメーガヴァンナに届けさせた。ヘーママーラーは自らの髪の中に舎利を隠して運んだという。彼らがスリランカで上陸したのが、このランカー・パトナの地であったと伝えられる。しかし、この伝承に関しての考古学的な証拠は存しない。

【参考】
薮内聡子『古代中世スリランカの王権と佛教』山喜房佛書林、2009年、88頁。

写真 108.　ストゥーパ

写真 109.　仏陀立像

セールウィラ・マンガラ・ラージャ・マハー・ウィハーラ
Mangala Raja Maha Vihara, Seruvila

地図：P.49 図5 ⓬

トリンコマリー南東　北緯8度22分13秒、東経81度19分12秒

ランカー・パトナから6kmほど西行し内陸に入ったところにある仏教寺院。仏陀の前頭骨を納めるストゥーパがあるという歴史的伝承により、スリランカの中でも重要な寺院の一つにあげられる。すなわち、紀元前2世紀、南インドのチョーラ、パーンディヤの侵入を恐れたルフナ王国のカワンティッサ王は、スリランカ北東部のシヴァ王が治めるセル国に協力を求め、軍事的な衝突を避けようと試みた。セル国はカワンティッサを受け入れ、カワンティッサはティッサ・マハー・ウェヘーラと呼ばれるストゥーパを作り、自身の所有する仏陀の前頭骨を新たに作った寺

院のストゥーパに納めた。カワンティッサ王は寺域を整備し、セールウィラ寺院の名は広まり、多くの巡礼者が集まった。その後、タミル人の侵入で衰えるが、20世紀に入り、1922年にスリランカ南部の僧ウェン・ダンバガサレ・スメダンカラによって再発見され、1931年までにストゥーパは修復された。1970年代以後、寺院内の整備が進められた。

寺院は、東西南北の門に囲まれ、中心には白亜のストゥーパ、ストゥーパの南西に菩提樹堂（ボディガラ）、南東に約10m四方で深さ6m近い石組みの沐浴場、この他に像堂や僧院、集会場、またストゥーパから真南に近年建造された4層の大型堂がある。

なお、この地はかつて広大な沼地であり、子ガモ（seru）の大群がいたことからセールウィラ（Seruvila）の名がついたのではとする説もある。

【参考】
”Seruwila Mangala Raja Maha Vihara”, UNESCO World Heritage Centre < http://whc.unesco.org/en/tentativelists/5083 >

写真 110.　ストゥーパ

写真 111.　菩提樹堂

写真 112.　沐浴場

写真 113.　4 層の大型堂

ゴーカンナ・ウィハーラ
Gokanna Viharaya

地図：P.49 図 6 ❸
トリンコマリー中心部　北緯 8 度 34 分 36 秒、東経 81 度 14 分 27 秒

トリンコマリーの古称であるゴーカンナの名を冠した仏教寺院。北にバック湾、南にダッチ湾を臨むように北東に突き出した半島の根元北側に位置する。この一帯は軍の施設で占められ、寺院自体もフォート・フレデリックの中に組み込まれたようになっている。

小高い丘の上に白亜のストゥーパと現代の仏立像がある。ストゥーパの傍らには小堂が立ち、中にはヴィシュヌ神等が祀られる。また、アヌラーダプラ時代に遡る仏立像と台座、仏足石がストゥーパのある区域の壁際に置かれている。寺の入口にも小堂を作り、中にタイから寄贈された仏坐像が安置される。

写真 114.　寺院外観

写真 115.　ストゥーパ

写真 116.　仏立像とストゥーパ

写真 117.　アヌラーダプラ時代の仏立像断片

フォート・フレデリック
Fort Frederick

地図：P.49 図 6 ❹

トリンコマリー中心部　北緯 8 度 34 分 30 秒、東経 81 度 14 分 29 秒

北はバック湾、南はダッチ湾に挟まれて北東に突き出した半島の根元から半島の中心部にかけて、東西約900m、南北約500mの区域に造営された要塞。半島の形状に即した平面プランを持ち、北東側は自然の高低差を利用している。現在でもダッチ湾に突き出した南側の稜堡、半島根元の北側の稜堡と北東に延びる石壁、南側にある1675年の年記の入った門等が目に留まる。また、ダッチ湾に面した海岸には、かつて稜堡に付されていたとされる大砲が置かれている。

この地に要塞が造られたのは17世紀に遡る。それ以前にはアヌラーダプラ時代のマハーセーナ王（在位275～303年）が、もともとこの地にあったジャイナ教の寺院を壊し、仏教寺院を建てたという伝説があり、また要塞の築造以前にコーネシュワラム寺院が同地に存在していた。1622年、ポルトガルのコンスタンティーノ・ド・サー・デ・ノロンハ将官によってコーネシュワラム寺院が破壊され、翌年要塞が完成。寺院の石材は要塞の建設に使われた。

1639年にオランダが侵入し、要塞は翌年破壊されるが、その後オランダによって新たに要塞が作られた。1672年にはキャンディ王国と結んだフランスによる攻撃があったが、オランダの抵抗によりフランス軍は撤退。1782年1月には英国が占拠するが、同年8月にはフランスによる再度の侵入によってフランスがこの地を占拠する。翌年、英国そしてオランダに割譲される。1795年に英国が再び占拠し、1803年にフォート・フレデリックと命名された。1905年に要塞は取り壊され、1916年に軍隊は撤退したが、1923年に防御隊が再び組織された。

第二次世界大戦中の1942年、スリランカのコロンボとトリンコマリーは日本軍の空襲を受けている。英国海軍への攻

撃が目的であったとされるが、トリンコマリーへの空襲は4月9日のことであった。現在はスリランカ政府軍の管理下にあり、軍の駐屯地となっている。

【参考】
“Trincomalee Fort Fredrick”, Department of Archaeology Sri Lanka < http://www.archaeology.gov.lk/web/index.php?option=com_content&view=article&id=98%3Atrincomalee-fort&catid=51%3Asites &Itemid=99&lang=en >
川島耕司「トリンコマリー」、杉本良男他編『スリランカを知るための58章』明石書店、2013年、293頁以下。

写真 118.　フォート出口

写真 119.　フォート入口の装飾

写真 120.　フォート西側の稜堡

写真 121.　フォートの変遷の説明

シュリー・アクボプラ・ラージャ・マハー・ウィハーラ
Sri Akbopura Raja Maha Vihara

地図：P.49 図 5 ⓫

トリンコマリー南西　北緯 8 度 26 分 59 秒、東経 81 度 4 分 15 秒

トリンコマリーからキャンディへA6号線を南西に25kmほど行き、マリポーターナ（Mollipothana）で左折してB618号線に入り、線路を越えてすぐ左折し、北東へ1kmほど進んだところに位置する仏教寺院。木の生い茂る中にいくつかの現代の新しい建物があり、域内に煉瓦積のストゥーパ等古代の遺構が残る。また、ストゥーパの付近にアヌラーダプラ時代に遡ると思われる古代の石造彫刻等の遺物が散乱している。ストゥーパは現存高約3m、20m四方ほどのマウンド状になっており、一部に煉瓦が露出するが、当時の形状は不明である。遺物は、仏、菩薩の彫像、立像の台座、建築部材等が確認できる。

1960年代にこの寺院の調査が実施されており、主要な出土遺物は当時のトリンコマリー考古博物館（現在は閉館。4-2参照）に収蔵された。本遺跡の出土品中、もっとも重要と思われるアヌラーダプラ時代のナーガ上の仏坐像（苦灰石製。7世紀。Acc. No. S177.）は、閉館中の博物館の建物内に残置されている。

【参考】
von Schroeder, U., *Buddhist Sculptures of Sri Lanka* , Visual Dharma Publications ltd., Hong Kong, 1990, pl. 27.

写真 122.　散在する遺物

写真 123.　ストゥーパ跡

6. 北部、東部地域以外の関連調査

2014年2月の調査では、コロンボからジャフナに向かう途上にあるアヌラーダプラおよびウァウニアにて博物館および仏教遺跡を視察した。本章では北部、東北部の調査に関連するものとして、ウァウニアで調査した遺跡および考古博物館と、改修中のアヌラーダプラ考古博物館について紹介する。

6–1. ウァウニア

ウァウニアは、アヌラーダプラの北に位置し、ジャフナへ向かう国道上に位置する。内戦期間中はLTTEの支配下にあった地域である。ウァウニアの町の中心部の交差点脇に、ウァウニア考古博物館があるほか、近隣に仏教遺跡も点在する。今回の調査では、以下の2つの仏教遺跡を調査した。

サマランクラマ
Samalamkulama

北緯 8 度 43 分 34 秒、東経 80 度 30 分 78 秒

サマランクラマは、ウァウニア考古博物館の入口に面したトリンコマリー・ロードを東に進み、ウママヘスワーン・ロードを南に折れた道路沿いに位置する。現在は、シヴァ寺院（Samalankulama Pilaiyar Kovil）に改変されているが、当初は仏教寺院が存在していた。現存するのは煉瓦造の僧院址とストゥーパ址で、周辺に建築部材とみられる石材も僅かに残る。同僧院址からブロンズ製の観音菩薩像（ウァウニア考古博物館所蔵）が出土している。ストゥーパは、スリランカでは見られない方形基壇の上部に八角形・六角形の下部構造が残る。

【参考】
von Schroeder, U., *Buddhist Sculptures of Sri Lanka*, Visual Dharma Publications ltd., Hong Kong, 1992, p. 264.

写真 124.　方形基壇

写真 125.　僧院址

マドゥカンダ
Madhukanda

北緯 8 度 44 分 70 秒、東経 80 度 31 分 84 秒

マドゥカンダはアンバランゴデッラ村に位置する。サマランクラマ同様、ウァウニア考古博物館の入口に面したトリンコマリー・ロードを東に4kmほど進むと、左手に標示が出てくる。マドゥカンダ・ウィハーラは、シュリー・ダラダー・ラージャ・マハー・ウィハーラ（Sri Dalada Raja Maha Vihara）と呼ばれる。ダラダーとは仏歯のことで、『ディーパウァンサ』『チューラウァンサ』等スリランカの史書によれば、仏歯をアヌラーダプラに運ぶ際に立ち寄った場所のひとつとされ、遺跡と並んで現在も仏教寺院がある。同寺院には、僧院址およびナーガラージャを表した

ガードストーン、仏陀像、僧院で使用されたとみられるトイレが残る。このほか、同地から出土したものとして、満瓶を表したガードストーンおよび仏足跡があるが、いずれもウァウニア考古博物館の所蔵となっており、前者は中央ギャラリーへの入口に、後者は廻廊に展示されている。

写真 126.　マドゥカンダ遺構

写真 127.　ウァウニア考古博物館

6–2. アヌラーダプラ

5月の調査中、改修中のアヌラーダプラ考古博物館を視察する機会を得た。改修事業の内容は、北部、東部地区の再開発と共通する要素が多いので、参考のために視察で得られた情報を記しておく。

アヌラーダプラ考古博物館は、カッチェリと呼ばれるかつての地域の行政機関の建物を再利用して1947年に設立した。スリランカ考古局の管理下にあり、博物館に隣接して考古局の事務所がある。博物館では建物の内外にスリ

写真 128.　改修中建物の外観

写真 129.　改修中建物の内観

写真 130.　改修作業の様子

写真 131.　建物脇の収蔵庫

ランカの各地で出土した文化財を保管展示している。

建物は英国統治時代に遡り、修復事業は考古局の予算によって実施しているが、現場の作業はアヌラーダプラに駐留する陸軍の職員に委託されている。

木材、セメントを併用した2階建ての建物で、木材は当初はチークを用いていたとされるが、改修にあたっては同じ材でなく地元で産するケート、あるいはアルジュンを用いている。しかし、当初のデザイン、技法を守って復元的に作られている。工期は約2年間を予定している。

7. まとめ、協力の可能性

本章では2014年に実施した国際交流基金の調査事業のまとめとして、調査で明らかになったスリランカ北部および東北部の文化財保存と活用の取組み、日本に対する支援や協力への期待、さらにこれらの調査結果を元に今後どのような協力の可能性があるのかについて述べる。

7–1. スリランカ北部および東北部における文化財保護の現状と課題

約30年続いた内戦が終結してから5年が経過し、スリランカ北部、東北部の状況はめまぐるしく変化している。ジャフナでは2013年の調査時にまだ残っていた地雷も、1年もたたない間に撤去が完了し、道路、鉄道のインフラ整備が急速に進み、コロンボとの往来も容易になった。内戦の爪痕はまだ所々に見られるものの、ジャフナ、トリンコマリーの街の中心部や有名な寺院等では国内外から観光客の姿があり、宿泊施設の建設も進められている。観光・地域開発の過程で文化財がうまく活用されれば、その価値が広く再認識されることが期待される。

写真 132.　旧ジャフナ庁舎前の看板

スリランカ考古局は現在、北部、東北部を対象に文化的特性を活かした地域開発を進めようとしている。ジャフナを中心とする北部は、仏教、ヒンドゥー教、キリスト教の信仰の足跡をたどることができるというスリランカ国内でもユニークな地であるばかりでなく、ポルトガル、オランダ、英国による各植民地時代の建造物が残る等多様な文化遺産が現存している。これらの多様な文化をどのように表象し、国内外に発信していくべきかが大きな課題としてある。トリンコマリーを中心とする東北部は、古来対外貿易の重要な海運の拠点であったと同時に、伝統的宗教の仏教遺跡が数多く残っているという2つの側面を重視した文化財の保護が進められている。前者の地域性は、今後トリンコマリー海軍海事史博物館を拠点に情報発信が進む見込みである。一方、仏教遺跡については、内戦直前に設立されたトリンコマリー考古博物館が機能することなく閉館されたままとなっている。東北部の広い範囲に存する各仏教遺跡が整備されていくなかで、これらの遺跡の情報拠点がトリンコマリー中心部に設置されれば、考古局がかかげる文化財を活かした地域開発の進展が望めるであろう。

上記のような地域文化の特性を国内外にアピールするため、考古局は各地域の歴史的建造物および遺跡の整備や管理を進めるだけでなく、地域の情報を集約した文化施設の設置計画を進めている。歴史的建造物や遺跡についてはジャフナ・フォートやトリンコマリー海軍海事史博物館のように政府主導のもと、すでに外国の支援を受けながら大規模な修復が実施されているもの、信者の寄進を受けて再建されている宗教施設、作業員を配して人が立ち入ることのできる範囲で整備された遺跡や、文化財の保管庫を有する遺跡もあった。一方、両地域は文化遺産の数が多く、考古局により存在は認識されているものの未だに管理の行き届いていない遺跡もいくつか現存する。

文化施設の設置計画については第3章で述べたとおり、かつては庁舎や地方長官の邸宅であった歴史的建造物を文化施設という別の目的の建造物に再利用すべく事業化を進めている。ジャフナの文化施設では地域の無形文化遺産の実演や工芸のワークショップを設ける計画もある。地域文化の発展にあたって有形、無形両方の文化財に配慮することは重要であるが、その実現には人材、資金、技術の面で多くの課題がある。

ジャフナ考古博物館では、将来的に上記の文化施設へ移転することも見込んで、学芸員が収蔵品管理の改善に取り組んでいる。ジャフナでは特にジャフナ大学の卒業生を中心に、考古局が若手専門家の人材育成を進めていることから、将来的には地域出身の専門家を主体に管理体制が整備されるだろう。2014年5月に一般公開が始まったば

かりのトリンコマリー海軍海事史博物館は、まだ展示の数が少なく、空調や休憩所が未設置である等改善が必要な状況にある。海岸に近く立地条件も良いことから、観光客に対し積極的に広報することで集客は見込めるが、より効果的に地域の魅力をアピールする取組みが求められる。また、同博物館の開館により、地域で初めて博物館教育事業が導入される可能性もあるらしく、このような新たな活動を成功させるため具体的な事業計画を立てる必要があるだろう。

7–2. 日本に対する協力および支援の期待

スリランカにおける内戦終結地域の文化財を活かした地域開発はまだ始まったばかりで、現地では専門家の派遣、人材育成や資金の面で外国の支援を必要としている。特に日本による支援の期待は高いことが考古局や大学の専門家からの聞き取り調査で明らかとなった。それは過去に日本が行なってきたスリランカや他国への支援実績が高く評価されていることも関連している。特に考古局や大学の専門家からはジャフナの文化複合施設設置計画を対象に、下記のような支援・協力を期待したいとの意見があった。

まず、マンダワラ教授を中心に起案された構想の具体化に日本の専門家が関わってほしいというものである。特に建物の修復について、スリランカ国内の専門家とともにワークショップを実施し、具体的な修復のマスタープラン作成に日本の専門家が関与することが求められた。複合施設内の設備については展示施設、アーカイヴ、文化財修復のためのラボに対する支援要請があった。今回のジャフナ考古博物館での意見交換を受けて、移転先の展示施設に対しても展示プランや文化財の管理方法について継続的に意見交換を行なって欲しい、地域の文化遺産アーカイヴでのガラス乾板をはじめとする古資料の活用に対する助言や、文化財修復ラボの設置に対しても機材供与や人材育成の面で支援を必要とするとのことであった。

7–3. 今後の協力の可能性

我々は協力相手国調査、国際交流基金の調査事業の終了後、文化遺産国際協力コンソーシアムの東南アジア分科会で調査内容を報告した[1]。同会ではスリランカ北部および東北部の文化財保護の状況は我が国であまり知られていないことから、調査で得た情報を報告書としてまとめ、関係者と広く情報共有するべきとの助言を受けた。本報告書刊行を以てその任務は全うしたと認識している。本報告書は英語版も同時刊行し、現地の関係機関や国際機関とも情報共有している。

また、今後も現地の復興に貢献できるような協力を継続すべく、調査後の考古局職員との報告会で意見交換した内容をもとに、日本による支援として、以下の5つの可能性を提案したい。

(1) 日本の民間財団による支援

本調査を通じて明らかになった通り、スリランカの北部、東北部ではすでに考古局が主体となり文化財保護の事業化が進められているが、事業遂行には資金面の問題を抱えている。今回の国際交流基金の事業は日本の専門家による調査を対象とする助成であったが、我が国にはトヨタ財団や住友財団等、在外機関を対象とする助成事業を実施している民間財団が存在する。文化遺産国際協力コンソーシアムが有するこれらの民間財団による助成事業の情報を考古局や大学と共有し、現地主導の事業推進を支援する。

(2) 学芸員養成の支援

スリランカでは日本の博物館の展示や管理方法に対する関心が高く、特に人材育成の手助けになるような支援への期待が高い。日本国内の博物館と現地の博物館の交流も視野に入れながら、スリランカの学芸員を対象に日本の博物館に関するスタディ・ツアーを企画する。また、JICAの委託事業として国立民族学博物館

1　協力相手国調査については第 23 回東南アジア分科会（2013 年 7 月 4 日実施、発表者：原本、福山）で、国際交流基金調査事業については第 25 回東南アジア分科会（2014 年 7 月 23 日、発表者：小泉、福山）で報告した。

と滋賀県立琵琶湖博物館が毎年共同実施している「博物館学コース」への参加を促す。

(3) 新設の博物館展示や管理に関する助言

今回の調査ではトリンコマリー海軍海事史博物館の展示を充実させることや今後の集客を目指すため、現地職員と意見交換したが、今後もこうした機会を設け、同館の発展に協力する。また、ジャフナ考古博物館の移設計画が本格化すれば、展示の手法や収蔵品の管理について助言する。

(4) 遺跡管理に関する若手専門家育成の支援

ACCU奈良が毎年アジアの若手専門家を対象に、遺跡・遺物の調査と保存や木造建造物の保護に関する集団研修を実施している。研修生募集や成果物の情報共有を継続し、研修への参加を促す。

(5) 日本の専門家との共同研究の推進

我が国にはスリランカの仏教美術や考古遺跡に関する研究の蓄積があるが、北部、東北部の文化遺産を対象とする研究はまだ少ない。本調査をきっかけに、ジャフナ大学をはじめとする現地の大学と共同し、我が国でも調査研究が進むことが望まれる。スリランカと日本の専門家の研究交流が推進されることにより、将来的な新たな支援要請に対し専門家を中心に迅速に対応することが可能となる。

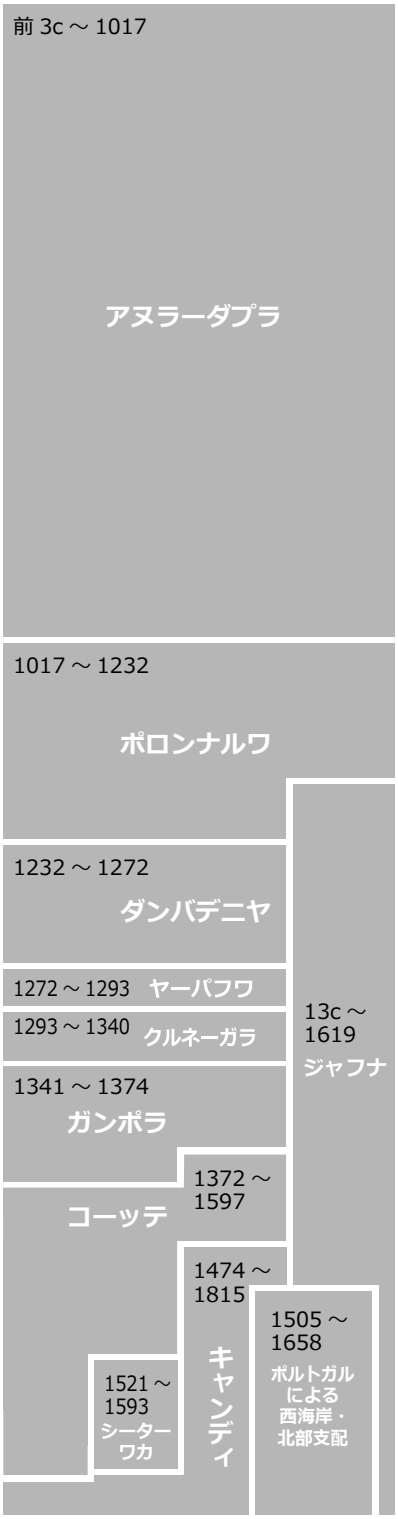
今回の調査を通じて、北部、東北部の地域の特性を考慮し文化財を活用した地域開発の計画がある一方、計画を実行するためには人、モノ、技術や資金の面で外国の支援を必要としていることがわかった。今後も継続してスリランカ考古局が重視する北部、東北部の地域開発と文化財保護の連携推進および地域の復興に寄与するような支援の可能性を、我が国の専門家や関係機関とともに探っていきたい。

最後に、本事業ではスリランカ考古局との連携により、短期間ではあったが効率的に調査を遂行することができた。日本とスリランカの関係が良好であることに加え、これまでの我が国による支援や交流に対する高い評価がこのような信頼関係の構築につながったと言える。考古局には大学の専門家の紹介、現地視察への担当者の同行や聞き取り調査、意見交換のための場所の提供等、さまざまな便宜を図って頂いた。ここに改めて感謝申し上げたい。

写真 133.　スリランカ考古局本部にて

付録

スリランカ史略年表



年代・世紀	出来事
～前1000頃	中石器時代
前900～300頃	初期歴史（鉄器）時代
前5世紀	釈尊、ナーガディーパほか3度スリランカに来降【伝承】 ヴィジャヤ来島【伝承】
前3世紀	デーヴァーナンピヤティッサ王の時、マウリヤ朝アショーカ王の子マヒンダが仏教伝来
前3～2世紀	アヌラーダプラにマハーヴィハーラ建立
前145	タミル人エラーラ、アヌラーダプラを陥落させて即位
前101	シンハラ人ドゥッタガーマニ王、エラーラを破りアヌラーダプラ奪還【伝承】
前89頃	アヌラーダプラにアバヤギリ・ヴィハーラ建立
3世紀後半	マハーセーナ王、アヌラーダプラにジェータヴァナ・ヴィハーラ建立
4世紀前半	仏歯がインドから招来
409	中国僧法顕、アヌラーダプラに滞在（～411）
5世紀後半	カッサパ1世王、父王から王位を簒奪、シーギリヤに新王宮を建築 モッガラーナ1世王、カッサパ1世より王位簒奪、アヌラーダプラへ遷都
5～6世紀	『ディーパヴァンサ（島王統史）』『マハーヴァンサ（大王統史）』の編纂
684	マーナヴァンマ即位
8世紀後半	ヴァジュラボーディ金剛智、密教を伝える
840	インドのパーンディヤ朝、アヌラーダプラを占領
862	セーナ2世王、パーンディヤ朝の都マドゥライを攻略
993	インド、チョーラ朝のラージャラージャ1世王、アヌラーダプラを攻略
1017	チョーラ朝、マヒンダ5世を捕える。アヌラーダプラからポロンナールワに遷都
1055	ヴィジャヤバーフ1世王、チョーラ朝を破り、シンハラ王朝復活
12世紀	パラークラマバーフ1世王、全土を統一
1187	ニッサンカマッラ王即位
1215	インド、カリンガ国王マーガのポロンナールワ支配
1232	ヴィジャヤバーフ3世王、ダンバデニヤへ遷都
1247	マレー半島のジャーヴァカ王チャンドラバーヌ、スリランカへ侵攻
1255	ポロンナールワを放棄
1272	ヤーパフワへ遷都
1293	クルネーガラへ遷都
14世紀	ジャフナ王国の成立
1341	ガンポラに遷都
1344	イブン・バットゥータの来島
1372	コーッテに遷都
1410	明の鄭和、コーッテ国王を拉致
1474	キャンディ王国成立
1505	ポルトガルの植民地支配開始。キリスト教（カトリック）の布教開始
1517	ポルトガル、コロンボのシナモン貿易の拠点を築く
1521	コーッテ王国分裂によりシーターワカ王国成立
16世紀中頃	コーッテとポルトガル、キャンディを攻略するが失敗
1557	コーッテ王ダルマパーラ、カトリックに改宗、仏教と対立
1597	コーッテ王国滅亡

時代区分	年代・世紀	出来事
1474 ～ 1815 キャンディ	1617	キャンディ王セナラト、ポルトガルと条約締結
	1619	ポルトガル、ジャフナ王国を滅ぼす
1505 ～ 1658 ポルトガルによる西海岸・北部支配 ジャフナ	1658	オランダ、ジャフナを占領し、島からポルトガル勢力を追放、植民地支配開始
	1739	インド、マドゥライのナーヤカ族ヴィジャヤ・ラージャシンハ、キャンディ王に即位
1658 ～ 1766 オランダによる西海岸・北部支配	1753	キャンディ王、アユタヤより仏僧を招聘、サンガを復興、シャム派の基礎を築く
	1766	キャンディとオランダ間で和平条約締結。コロンボ、ゴール、トリンコマリー等割譲
1766 ～ 1796 オランダによる沿岸全域支配	1796	英国、オランダからコロンボ等を奪取
	1802	アミアン条約、島内のオランダ領が英国に譲渡 ビルマで修業した僧によりアマラプラ派設立
	1815	英国、キャンデイ王国（カンダ・ウダラタ王国）を滅ぼす キャンディ条約締結
1815 ～ 1948 英国による植民地支配	1832	英国、全島の一元的支配を確立 英国、プランテーション農業の開発に伴い、コーヒーを栽植
	1867	紅茶栽培の開始
	1883	コロンボでシンハラ仏教徒とキリスト教徒の間で暴動
	1889	ダルマパーラと神智学協会オルコットが訪日
	1890	考古局創設
	1919	セイロン国民会議の結成。独立活動開始
	1931	ドノモア憲法により、普通選挙に基づく国家評議会を設置
	1940	古物保存法を発布
	1942	日本軍、コロンボとトリンコマリーを爆撃
	1948	英連邦内自治領セイロンとして実質的に独立
1948 ～ 1972 英連邦内自治領	1952	日本と国交樹立
	1956	バンダラナイケ首相就任。シンハラ語公用語法制定（＝唯一の公用語）
	1960	シリマボ＝バンダラナイケが世界初の女性首相に就任
	1972	新憲法公布、共和国として完全に独立
1972 ～ 1978 スリランカ共和国	1977	議員内閣制から大統領制へ変更
	1978	国名をスリランカ民主社会主義共和国に変更
1978 ～ スリランカ民主社会主義共和国	1980	ユネスコスリランカ文化三角地帯プログラム開始
	1982	スリ・ジャヤワルダナプラ・コッテに遷都
	1983	大騒擾事件、タミル・イーラム解放の虎（LTTE）との内戦本格化
	1986	LTTEがジャフナ半島を制圧
	1987	R.ガンディー首相とジャヤワルダナ大統領がタミル人自治拡大を認める協定に調印 スリランカ・インド平和協定成立、インド平和維持軍（IPKF）がスリランカへ進駐 憲法改正（シンハラ語およびタミル語を公用語と規定。州評議会制度を導入）
	1990	ユネスコ日本信託基金事業としてマルワッタ僧院遺跡の修復事業を実施（～1996）
	2002	政府とLTTEとの停戦合意成立、和平交渉開始
	2003	LTTEによる和平交渉の一時中断の表明 スリランカ復興開発に関する東京会議
	2004	スマトラ沖地震による津波被害で沿岸部に大被害、3万人以上が犠牲に
	2008	停戦合意失効 東京国立博物館にて「スリランカ―輝く島の美に出会う」展開催
	2009	政府軍、北部LTTE支配地域を全て奪取。内戦終結
	2010	過去の教訓・和解委員会（LLRC）を設置
	2011	5～6月、東日本大震災支援のためスリランカ政府が復旧支援チーム派遣
	2012	LLRC行動計画公表

スリランカ北部、東北部における文化財保存と活用
調査報告書

文化遺産国際協力コンソーシアム
2015 年 3 月発行

[連絡先]
〒 110-8713 東京都台東区上野公園 13-43
（独）国立文化財機構東京文化財研究所所内
文化遺産国際協力コンソーシアム事務局
Tel.03-3823-4841 Fax.03-3823-4027
http://www.jcic-heritage.jp/

文化遺産国際協力コンソーシアム 平成 24 年度協力相手国調査報告書
国際交流基金平成 25 年度、26 年度文化協力（助成）プログラム事業報告書